学校事務の夢をかたちに

― 田村地区事務研の取り組み ―

● 田村地区公立小中学校事務研究会 ●

はじめに

平成17・18・19年度と３回に渡って、福島大学現職教職員研修講座・学校事務職員研修講座の講師を務めさせていただきました。私自身の取り組みなどではなく、田村地区事務研のさまざまな活動や、その下地でもあるこれまでの経過・運営方法などについての話題がほとんどだったように思います。

雑ぱくに始めた話でしたが、３年の間に何か整然としたものになってくるような感覚が自分の中にできました。その時々のニーズに合わせながらひとつひとつ取り組んできたことばかりですが、つながりを考えながら整理してみると、小さな積み重ねが意外に大きなものになってきていると感じたのです。会員の意識も大きく変わりました。

そんな折、研修講座全般のご担当であった福大・宮前先生から、ぜひ田村の活動を広く紹介してみてはどうかとお声がけいただき、月刊誌「学校事務」の出版元・学事出版へその概要を送らせていただいたところ、平成20年４月号から１年間、12回に渡る連載の機会に恵まれ、このたびその全編を書き終えた次第です。

その内容については本編のとおりですが、大小さまざまな活動を１年間じっくりと振り返ることによって、何となくやり過ごしがちだった活動が、どれもとても深い意味のあるものであることに気付かされました。同時に、私たちが作成したたくさんの計画＝プログラムと照らし合わせて考えると、活動を体系的に捉えることができ、それが実は活動のベースとしてしっかり根付いていたようにも感じた次第です。自分自身、会員にとっても、今後の活動をすすめていくうえでたいへん貴重な機会であったと痛感しています。関係の方々には深く感謝するばかりです。

もちろん、我々の活動は何か特別なものではなく、どの事務研でも同じように取り組んでいることだろうと思いますが、せっかくの機会であり、さらに多方面に広く伝わっていくことを期待して、各種資料と関連づけながらご覧いただけるようまとめさせていただきました。学校事務分野の出品はあまり例がないと思いますが、気軽にお読みいただければ幸いです。

平成21年1月

田村郡三春町立桜中学校 主査　橋 本 広 治
（田村地区公立小中学校事務研究会副会長・広報担当）

学校事務の夢をかたちに

－ 田村地区事務研の取り組み －

目　次

1　はじめに

はじめに …… ①
執筆のきっかけ …… ②
学校事務の夢をかたちに　田村地区事務研特別PR版 …… ③
連載年間執筆計画 …… ④

2　本 編

第１回　学校事務の夢を描こう！ …… 1
第２回　研修・研究ガイドラインに夢を託して …… 4
第３回　夢に向かって、この指とまれ！ …… 7
第４回　こつこつこつこつ、夢の足音 …… 10
第５回　プログラムにちりばめられた夢 …… 13
第６回　夢が叶った!?　情報化すすめ方プラン …… 16
第７回　つたえよう今を、届けよう夢を …… 19
第８回　積み上げるちょっとの夢 …… 22
第９回　夢のスクラム …… 25
第10回　夢か幻か、あんしんサポートプラン …… 28
第11回　グランドデザインが夢をかたちにする …… 31
最終回　夢をあきらめないで …… 34
平成20年度会員名簿 …… 37

3　実践記録（平成20年度）

お知らせ ---------- ①
活動全般 ---------- ②
カリキュラム研修 ---------- ③
コンピュータ研修 ---------- ④
その他の研修 ---------- ⑤
研究実践 ---------- ⑥
方部別研修・田村市 ---------- ⑦
方部別研修・三春町 ---------- ⑧
方部別研修・小野町 ---------- ⑨
その他の研究（40周年記念全国公立小中学校事務研究大会福島大会） ---------- ⑩

※抜粋収録・詳しくは「たむら事務研ちょっとニュース」で。

http://hiromaru.typepad.jp/tamurajimu/

4　おわりに

執筆を終えて ---------- ①
会員の感想 ---------- ②

学校事務の夢をかたちに

－ 田村地区事務研の取り組み －

資 料 目 次

1　活動・組織の見直しのまとめ［本編・第１回関係］ ---------- 1 ～ 4

2　主題別研究会　平成19年度末中間報告［本編・第３回関係］ ---------- 5

3　カリキュラム研修の様子［本編・第４回関係］ ---------- 6 ～ 8

4　PCスキルアッププログラム［本編・第５回関係］ ---------- 9

5　スキルアップマニュアル［　同　］ ---------- 10 ～ 15

6　情報化すすめ方プラン［本編・第６回関係］ ---------- 16 ～ 17

7　じむPlanner［本編・第７回関係］ ---------- 18 ～ 19

8　会報あぶくまClip・メールマガジン［　同　］ ---------- 20 ～ 21

9　たむら事務研ちょっとニュース［本編・第８回関係］ ---------- 22

10　ちょっとニュース・エントリシート［　同　］ ---------- 23

11　ちょっとニュースによる実践紹介［　同　］ ---------- 24 ～ 25

12　平成18年度東北大会・発表内容［本編・第10回関係］ ---------- 26 ～ 33

13　平成18年度東北大会・発表報告［　同　］ ---------- 34 ～ 37

14　たむら学校事務あんしんサポートプラン素案［　同　］ ---------- 38 ～ 40

学校事務の夢をかたちに

－ 田村地区事務研の取り組み －

田村郡三春町立桜中学校　橋 本 広 治

「学校事務」４月号より、私たちの取り組みの様子を紹介しています。１年間に渡る連載となりますが、ぜひご購読いただければと思います。執筆者割引なし！

総会のとき（の懇親会のとき）に、車のマフラーと桜についてちょっとお話ししました。マフラーの話は別に書いたので、ここでは改めて桜のことを書いておきます。くどくてすみません。

滝桜が宇宙へ行くことになりました。さすがにこんな展開は予想だにしなかったのですが、宇宙へ飛び立っていく「タネ」の採取はもう間もなくです。

その滝桜がこれほどまでに人を魅了するようになったのはなぜでしょう。紅枝垂れの見事な色や枝ぶり、それがしかも樹齢千年とも言われる老木であること。確かにそうでしょうが、もうひとつ「意外性」というのも要因ではないかと思うのです。こんな田舎のコンビニもないところに遠路来るわけです。曲がりくねった道、見渡すばかりの山あい、ホントに桜などあるのかともう半分イヤになっていると、いきなり視界が開けて忽然と現れた大木に驚くわけです。でもそれほどじゃないんじゃないの？という予想を見事に裏切って、近づいてみたらもっとすげかった‥‥。たかが一本桜だけど「いやぁすごいねぇ」などとすっかりやられてしまうわけです。

そんなシチュエーションがヒロユキくんちの近くにもありまして、ここは分校跡なんだけど、近年訪れる観光客やカメラマンが少なくありません。特にダムの方から町に向かってきてカーブを過ぎて、やはりいきなり開ける視界の枠いっぱいに桜が咲き誇る様は、どうしたって人の心をゾクゾクさせるものです。小沢の桜だって夏井の千本桜だって、やっぱり「意外性」があるんじゃないかなぁ。

事務研もそんなハッとするような企画・運営に心がけることが大切ですね。活動に対する関心や意欲を高めるものですから、組織の課題としていつも考えていくべきでしょう。と同時に、我々自身がハッとするような気持ちになれることも大切です。これは個々のマンネリ化した感覚を打破していくことですし、何にでも思いを込めるということだろうと思うのです。夢のある取り組みを企画し、夢を持って取り組んでいく。まぁ夢物語のような話ではありますけれど‥‥。

今回の連載も正に夢づくしで書いています。端から見れば「夢、夢って、アホじゃないの？」と見えるかもしれません。現実はそうかもしれません。しかし私たちの取り組みに「夢」がなかったら、無味乾燥な決まり事を作って終わりでしょう。任意に組織を作ってまで活動をする意味さえなくなります。お上が全てを決めてそれに従って仕事をするだけですから。

しかし同じ決まりでも少なからず「思い」を込めることができたら、私は仕事に対するやりがいを感じるし、もっともっと良くしていこうとする向上心さえ覚えます。そのささやかな思いこそが「夢」だと思うのです。それが子どもたちの豊かな学び・育ちを支援するということにつながるのではないでしょうか。

夢をかたちにする‥‥言葉から受ける印象ほど簡単なことではありません。気概ある取り組みをすすめなければ、何ひとつかたちにすることもできず、はかなき夢の如く全て消え去ってしまうことでしょう。小さなひとつでも思いを込めて着実に実践していくことによって、それぞれの思い描く理想像に一歩でも二歩でも近づけるものと考えています。

田村の取り組みが泡と消えずに続いているのは、きっと強い思いがひとつになっているからだと思うのです。そのことも含めて広く伝えることができたら、学校事務はまだまだ夢のある仕事になっていくような気がするのです。

皆さんが築いてきたものを、私が上っ面だけあっさり紹介するのはどうかとも思いましたが、全国事務研大会が福島で開催されるこの年に、田村から飛び立っていく「タネ」が、全国のどこかで芽を出すことになるのかもしれないと思えば、それもまたすばらしい「夢」のような気がします。これまでのまとめと総括の機会になれば、組織や活動の見直しと相まって、より確かな取り組みにつながっていくものと考えながら執筆しています。

※本編では月替わりで皆さんの写真を掲載してくださいとお願いしてあります。どの写真がいつ載るのかは私もわかりません。事後承諾のような形になりますが、ご了承ください。

［　月刊「学校事務」平成 20 年４月号 ～ 平成 21 年３月号連載　］

田村地区公立小中学校事務研究会
田村郡三春町立桜中学校　橋 本 広 治
（田村地区公立小中学校事務研究会副会長）

第１回　学校事務の夢を描こう！

こんにちは田村地区事務研です

40 周年記念全国公立小中学校事務研究大会・福島大会が、福島県のほぼ中央、郡山市においてこの夏開催されます。全国の皆さんにお会いできる日を心待ちにしています。

その郡山市の東隣・阿武隈山系に位置する田村市と田村郡三春町及び小野町との１市２町で構成される地域を「田村地区」と呼んでいます。国の天然記念物に指定されている三春町の「滝桜」や田村市滝根町の幻想的な鍾乳洞「あぶくま洞」などはご存じの方もいらっしゃるでしょうか。

田村地区公立小中学校事務研究会（以下「田村地区事務研」）の会員数は現在 49 名。市町村合併以降学校統廃合がすすんでおり、会員の減少が見込まれています。中・小規模の学校がほとんどですが、補充職員も含め経験年数の少ない会員から一定の経験を積んだ会員まで、現在は幅の広い年齢構成になっています。しかし学校事務を取り巻く環境も事務処理のスタイルも大きく様変わりし、少ない官制研修を補完するために事務研として研修・研究の機会を確保しながら資質向上をめざしてさまざまな活動を展開しています。

私たちの活動は特別なものではなく、どこの地区でも同じように取り組んでいるものと思っています。共同実施や組織マネジメントなど、昨今の話題の方が読んでもおもしろいのでしょうが、そういう時代だからこそあえて泥臭い実践的な話をしてみようと考えました。

いざ現実的な話になると、それぞれの事情もあってなかなか同じようにはすすめられないものですが、少しでも皆さんのお役に立てることを願いながら、私たちの小さな取り組みを数回に分けてご紹介していきたいと思います。

学校事務の夢をかたちに

田村地区事務研では、会員一人ひとりが強い意識で自らを変えながら高い意欲で取り組んでいこうと、平成 11 年度から次のような活動テーマを設定して活動をすすめています。

> **学校事務の夢をかたちに**
> － そこから改善・定着化 －

それまでのさまざまな取り組みの中で、こんなことがこうなったらいいなぁ、こうしたいんだけどできないだろうか、そうしたたくさんの「学校

事務の夢」を語り合い、思い描いてきました。それらを夢で終わらせることのないように、そのためにほんの一歩でも今足を踏み出せば、きっと大きな事務改善につながるはず。そうして少しずつ定着させていけば、きっとそれは夢ではなくて「かたち」になって現れるはず‥‥。そんな深い思いが込められています。

例えば、最も関心の高いものはやはり今目の前にある実務だろうと思います。そこにわずかでも、小さくても、夢を思い描いていくことが重要です。実務を単なる実務としてこなすための研修ではなくて、夢のあるものにしていくための研修なんだと考えれば、活動に対する意識は大きく変わるのではないでしょうか。

夢をたくさん見て、その夢をみんなで語り合い、夢を思い描いていく。そんな事務研にしていきたいと考えることもまた夢を描くことなのでしょうね。

田村地区事務研の委員会活動

テーマを設定して活動をすすめるまでには、相応の紆余曲折がありました。田村地区事務研では、昭和50年代までは委員会がなかったのです。学校事務職員がどんどん採用された頃でしたが、それから数年後、田村にも若い事務職員が溢れていました（今も気持ちだけは‥‥）。当時の年齢構成は極端で、50代くらいの方が数名、30代が少々、あとは20代という実に若い地区だったのです。しかし県大会での発表もいずれ回ってくるという話も耳に入るようになり、何かを始めなければという意識が高まる中「研究推進委員会」を設けてようやく研修・研究活動がスタートしました。昭和60年度のことです。

それも昨年度までに、研修、研究、資料、広報、情報化推進と、５つの委員会で分担するようになり、さまざまな活動をすすめてくる中で、校長会などの理解も得ながら年間６回の１日研修会を確保してきました。いずれご紹介する予定ですが、カリキュラム研修、主題別研究、コンピュータやインターネットの活用など、さまざまな活動スタイルを試すことができたと思っています。

いずれの活動もその時々のニーズだったように思います。必要なことはやってみようと、その前後の実績を踏まえながらも、形にとらわれずに活動を展開してきたつもりです。また、トップダウンではなくボトムアップでの取り組みになったことで、活動に対する高い意識・意欲がある程度維持できてきたものと思っています。

運営・組織を見直す時期

さて、振り返ってみると研究推進委員会の設置から四半世紀が経過し、その間に社会もすっかり様変わりしました。特に近年、バブル崩壊以降の不景気や財政難、情報公開や説明責任、能力・成果主義、目標管理制度、公務員制度改革と、頭の痛いことばかりです。市町村合併や学校統廃合などもあります。他地区の過員の話はもうすぐ田村の話にもなってきます。

そういうときに田村の学校事務はどうかと考えると、会員は減少してきましたし、補充職員が少なくありません。そうした人的な課題があります。また資料委員会や情報化推進委員会の活動は、単独ではなく横断的なものですので運営しにくい面もあります。さらに広報活動の在り方などを考えると、全般的に考える必要があるのではないか、運営や組織を見直す時期に来たのではないかという声が高まってきたのです。ダラダラしてしまう恐れもありますのでいい機会かもしれないという思いもありました。

図に示したように５つの委員会がありました。それぞれがさまざまな取り組みをすすめてきたわけですが、これを一旦スクラップして、どんな活動をすすめるべきなのか考え直し、リビルドすることから始めました。

見直しにあたっての会員アンケート調査によると、実務研修や法令研修などを担当する研修委員会、コンピュータ研修やネットワーク活動などを担当する情報化推進委員会への期待が大きいこと

がわかりました。逆に会報などを担当する広報委員会、意外なところでは自己課題研究などを担当する研究委員会はあまり期待されていないという結果でした。ただ、もう少し具体的に活動を特定して調査すると、どの委員会にもメジャーな取り組みがあり、どんな活動・取り組みが期待されているのか、委員会そのものではなく運営方法や回数的な見直しも望まれている、ということが少しずつわかってきました。雑ぱくになりつつあった活動を整理するチャンスだったのです。

夢を実現させるために

では、どんな活動をすすめるべきかということですが、ひとつは「我々自身のクオリティ向上と確実な積み上げ」をすすめること。それから「高い意欲を持って一層の標準化・効率化」をすすめること。また「学校事務に対する理解を深めてもらってさまざまな連携」を図っていくこと。さらに、それらは「情報や成果・課題を共有した活発な取り組み」でなければなりません。そう考えました。

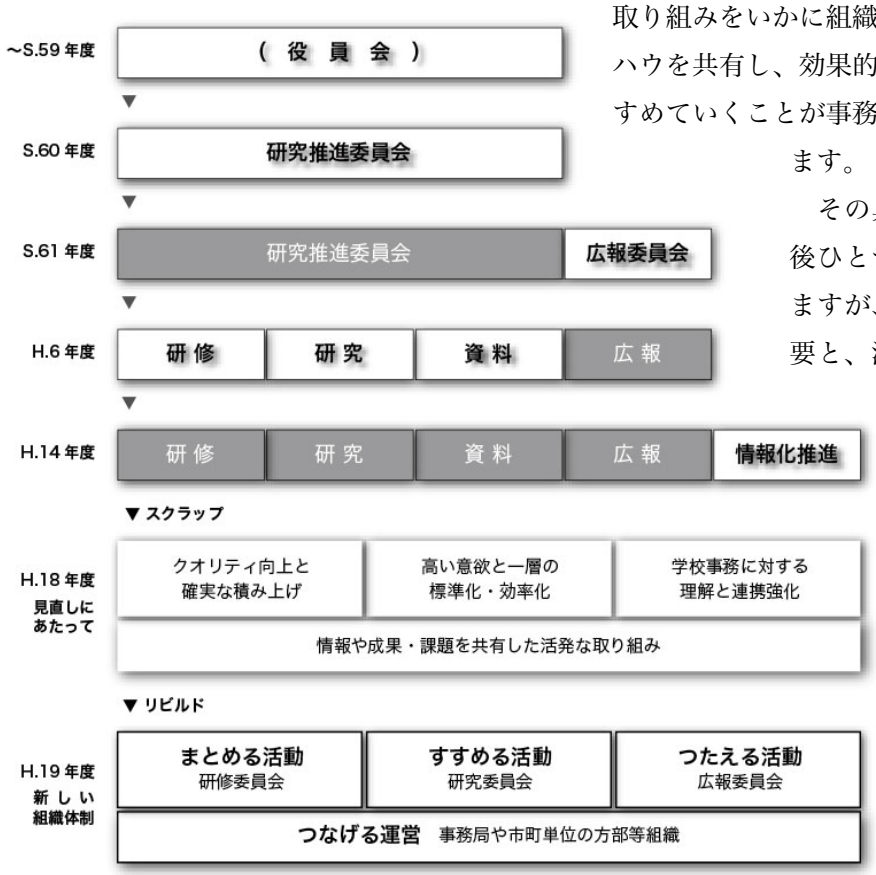
あまり細かくしないで３つくらいの委員会ですすめてはどうか、そういう観点とも一致して、確実な積み上げを「まとめる活動」として研修委員会が、一層の標準化・効率化は「すすめる活動」として研究委員会、理解を深めてもらうのは「つたえる活動」で広報委員会が、それぞれあたることにしたんです。

また､それらを「つなげる運営」と位置づけて、事務局や市町単位の組織などもしっかりさせていくことにしたんです。これまでの活動そのものをなくすわけではないので、どんなふうに分担していくかということについては、年度末から年度当初にかけて委員会間である程度調整しながら、平成 19 年度は移行期間と捉えてスタートした次第です。

ところで、学校事務の夢って何でしょう。結局のところ個々の思いそのものではないかと思っています。会員それぞれの課題をしっかり解決していくことかもしれません。夢を実現させるための取り組みをいかに組織的に展開していくか、ノウハウを共有し、効果的な手立てを考え、全員ですすめていくことが事務研の役割ではないかと思います。

その具体的な中身について、今後ひとつずつご紹介しようと思いますが、次回は新しい委員会の概要と、活動のベースになっている「研修・研究ガイドライン」についてお話ししたいと考えています。

［平成 20 年４月号］



第２回　研修・研究ガイドラインに夢を託して

まとめる・すすめる・つたえる

前号でご紹介したように田村地区事務研ではこれまでの５つの委員会を３つに再編しましたが、活動そのものが大きく変わったわけではありません。目標や在り方などを再確認し、一つひとつの活動を意味のあるものにして、それをしっかり積み重ねていこうということを申し合わせ、それまでの活動をおおむね次のように分担しました。事務局や方部運営についても位置づけをある程度明確にしました。

１　まとめる活動‥‥研修委員会

○カリキュラム研修会（５回）

○コンピュータ研修会（２回）

２　すすめる活動‥‥研究委員会

○主題別研究会（４回）

○方部別研究会（５回）

○県大会事前研修会（１回）

○法令改正時の対応資料提供等（随時）

３　つたえる活動‥‥広報委員会

○会報及び会報特集号発行（計６回）

○じむ Planner 配信（毎月）

○ホームページ及びブログ運営（随時）

４　つなげる運営‥‥事務局・方部別組織

○メーリングリスト運営（随時）

○市・町ごとの活動推進（別計画）

また、教育委員会や校長会などのご理解をいただき年間６日間の全日活動日が確保されていましたが、全日は３日程度とし、半日にしながら回数を増やしたり市町ごとの計画で活動をすすめる日を設けたりするなど、日程的な見直しもすすめました。

以上が田村地区事務研活動の全体像ということになりますが、各委員会活動の詳細については改めてご紹介する予定です。

研修・研究ガイドラインの策定

話は前後しますが、こうした活動をすすめるにあたっては単年度の活動計画はもちろん、長期的な展望も必要になってきます。活動テーマを設定した平成 11 年度、過去の活動内容を精査してみたところ、どうしても偏りがちだったことがわかりました。

そこで、どのような観点で研修・研究をすすめるのか、また新たな課題への対応や活動の活性化を目指し、次の７つの方針で「研修・研究ガイドライン」を策定して、田村地区事務研活動の基本的な指針とすることにしたのです。

１　学校事務の動向、学校事務職員像を展望し、それに対応できるものとする

２　研修の実績や成果、会員アンケートを分析・考察する

３　過去の研究テーマや会員アンケートを分析・考察する

４　地区の現状を踏まえながら、県事務研の研修・研究基本計画を活用する

５　研修・研究活動の時数をおおむね割り振り基準を設ける

６　任命権者研修の実態を考慮する

７　会員の自己啓発を促し相互に高め合う「共育」を基本的な視点とする

ガイドライン策定によって、我々の具体的な活動内容と範囲が明らかになり、活動の軌跡を会員それぞれが認識できるようになりました。「夢をかたちに」するための手段としてこの「研修・研究ガイドライン」に夢を託したのです。

５年間を一つの研修期間と捉えたこのガイドラインプログラムは、平成 12 年度からスタートしました。誌面の関係で詳細は紹介できませんが、学事出版社刊「カリキュラム経営を支える学校事務」（または学校事務 2006 年 11 月増刊号）をぜひご参照ください。

ガイドラインへの思い

ガイドラインに沿った新しい活動ですが、とりわけ「カリキュラム研修」と呼んでいる研修会は、これほどの内容をほんとうに消化しきれるのかという大きな不安を抱えながらのスタートでした。担当の委員会では研修内容をどんどん企画せざるを得ません。配布される資料もかなりのボリュームです。その時々のニーズに合わせてすすめてきたそれまでのスタイルから一変し、意欲こそあるものの正直なところ飽和状態という日も少なくありませんでした。内容以上にカリキュラム消化への意識が強くなっていることなどを反省しながらも、一定のペースで続けることを心がけると、強制されるかのような感覚もやがてなくなり、急がずに取り組むことができたと思っています。

このガイドラインには次のような端書きが添えられています。

「我々の活動というのは、ぼんやりとした何か大きなものを、細かくかつ明確なものにしていくことでしょう。まさに『夢をかたちに』するようなことです。もちろんその間には数限りない実践と研究の繰り返しがあり、そうした過程や背景こそが定着化への重要なステップであることは言うまでもありません。

視点を変えてみましょう。ぼんやりとした遠くの風景の側から見れば、自分のいるこの場所もやっぱりぼんやりした風景に映っているのです。個々には明確なはずなのに。そこで一歩踏み出せば一歩分だけはっきりしてきます。広がり方も変わってくるし新しい道も開けるものです。そうして段階ごとに状況を理解し合えば、いずれ立体地図が完成するでしょう。だから情報を交換し合い共に活動をすすめることが必要なのですね。途絶えることなく全員で手をつなぐことです。

この『研修・研究ガイドライン』にも示されるように、課題は無限にあります。それぞれがその360度パノラマの中心にいます。しかし少しずつでいいから同心円のサイズを球状に大きく広げていくことによって、仲間のボールとの重なりが深まってきます。そうして田村の大きなボールをつくりあげ、新しい教育にも変幻自在に対応していくことができるようにしていきたいものです。」

個々の取り組みの姿勢や成果を全体で集約して強くつないでいくようなイメージですが、それが田村の活動の特徴かもしれません。委員会活動の方向性や目標を明確に示すことで、会員それぞれの活動意欲も高まります。そんなところから課題意識は生まれるものだと思います。また、テーマなどはどうしても抽象的なものですが、より具体化・体系化して細かく示されると、課題意識がよりはっきりしたものになってきます。

課題の違いや差を乗り越えるかのように「これはだいたいできている」「ここがちょっと弱い」と、それぞれが確実にボトムアップしてくると思います。自己課題を生かした研修・研究をすすめるひとつの方法として参考にしていただければ幸いです。

ガイドラインがもたらすもの

このガイドラインプログラム（研修部分）は、平成16年度で最初の5年間を終えることとなりました。が、残念ながら計画どおりにはすすまないもので、やり残しもたくさんあります。一定の範囲は押さえたいという思いで担当委員会が企画してすすめてきましたが、特に当初は数をこなすことが最優先となった感もありますし、各領域の単位事務の深さをカバーすることも容易ではありません。このプログラムがいかに広範なものであるかということも実感しました。課題はたくさんあります。

しかし、自分たちの夢を託したガイドラインに沿った活動をすすめることは、少なからず達成感・成就感があり、それぞれ次の目標を立てる意欲にもつながっています。また、カリキュラム研修も聴いて終わりではなく、やはりガイドラインに沿った研究活動へと自然につながってきます。研究活動は主題別や方部別にすすめられていますが、知識や知恵を出し合うことで課題解決の大きな足がかりになります。ガイドラインと会員とのつながりが活動全体をより高いものにしてきたのだと言っても過言ではないと思っています。

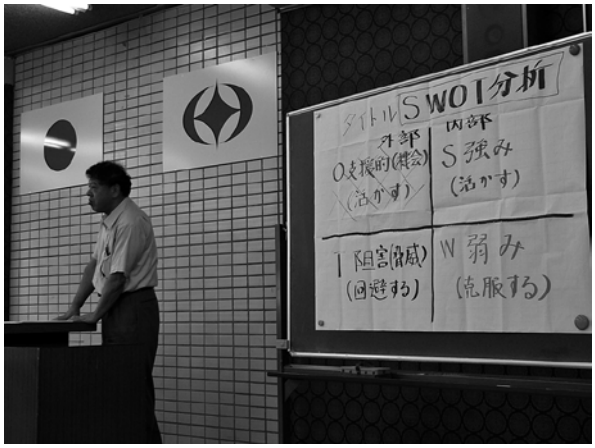
いずれにしても、5年間では無理でも重点項目の反復研修と未消化項目の新規企画とを繰り返しながら次のスパンへとつないでいくべきだと考えています。そのため、現在は暫定的に継続運用しながらアンケートなどによる細かい反省や課題なども踏まえた見直しをすすめています。17年度の県事務研究大会運営や18年度の組織再編作業などで遅れていましたが、県事務研長期研修計画との整合性なども視野に、間もなく新しいガイドラインが示されようとしているところです。

新しいガイドラインは、全体研修だけでなくグループ研修などにも対応できるような達成目標を示し、また全領域に渡るバランスの取れた研修がすすめられるような工夫もしていると聞いています。研究活動においては、設定目標をシンプルにしながら短期間で一定の達成を見て次のステップへすすむように促すなど、会員がより取り組みやすいものとなるだろうと期待も高まっています。

さて、2回に渡り田村地区事務研活動の枠組み、アウトラインをご紹介してきました。「研修・研究ガイドライン」をベースに各委員会がさらに細かいプログラムを作成してさまざまな取り組みをしています。

いよいよその一つひとつについてお話しするわけですが、次回は「すすめる活動」の研究委員会が担当する活動をご紹介したいと考えています。

［平成20年5月号］



第３回　夢に向かって、この指とまれ！

個々の課題に基づく取り組みを

２年に１度、年度当初に１枚の調査用紙が届きます。「新しい研究期間の始まりです。この春からどんな研究課題に取り組みますか？」 それまでの経過、成果などを再認識する瞬間です。と同時に、ふと我に返り現在の自分にとっての課題、この学校の課題などに向き合って、課題解決に向けてのさまざまな思いを描くときでもあります。

田村地区事務研では、研究活動の最大の取り組みである「主題別研究」を継続してすすめています。会員それぞれが抱えている課題を最優先しながら、可能な限りそれをグループで研究していこうというものです。基本的なすすめ方は次のようになります。

取り組みたいテーマの報告
○「研修・研究ガイドライン」を基に

↓

研究委員会が集約・班編成
○関連するテーマで、10人・５班程度

↓

具体的なテーマや目標の設定
○１年次当初にそれぞれの課題や思いを確認
○原則として研究期間は２年間

↓

研究の推進
○１年次末に中間報告
○２年次当初に異動者の調整・内容の再確認

↓

研究のまとめ
○研究報告と研究協議 → 実践・定着化へ

できるだけ個々の課題についての取り組みにつながるよう、最初の会合で具体的な研究内容や目標、到達点などについて協議します。原則として２年間を目処に目標に到達するような計画づくりをするわけですが、無理な目標、過度な理想ではなく、小さくても確実な実践を積み重ねようということも確認しているようです。目標に到達することはもちろん大切ですが、着実なステップを踏んでその時々に達成感を味わうことにより、一層研究意欲が高まるのではないかと考えています。

また、あまり長い研究になると、人事異動などの際に途中から入りにくいという課題があります。１年くらいの差であれば、年度当初にそれまでの経過を説明したり資料を提供したりして追いつくことも可能です。２年間で無理であればさらに２年間延長するという確認のもと取り組む班もあるようです。

縦割りの必要性

実のところは、経験が浅いとか豊富だとか、それで課題の有無や大小が決まるわけではありません。経験豊富なベテランだって如何ともし難い課題はあるものです。むしろその「経験」が邪魔をして一歩すすめない辛さをお感じの方も少なからずいらっしゃるのではないでしょうか。ただ、ここまで乗り切ってきた（？）知識や知恵があります。

一方、若い方々はどうしても目先の課題に注視しすぎたり、逆に目標が大きすぎてどの道を選んでいいのか迷ったり、未知の課題の存在にももちろん気づきにくいものです。しかし実践力は抜群です。前例にとらわれにくい斬新さも持ち合わせています。

これらが一体になったらどれほど強いものになるか、考えただけでもワクワクします。

そこで、会員それぞれの希望を尊重しながらも、特にベテラン層での調整をしながら「縦割り」的な要素を取り入れて、新しい感覚と豊富な経験とを融合できるような班づくりからスタートします。

それぞれの目標に向かって「こんな研究がしたい！」と手を挙げ、同じような内容を束ねながら、いくつかの課題に取り組んでいくというわけです。もちろん取り組みそのものは「縦割り」に関係なくあくまでもフラットにすすめることが基本です。

現在の状況と計画

これまでの活動についてのアンケート調査結果などを踏まえ、平成19年度からの主題別研究では、おおむね次のような点について配慮しました。

○平成20年度開催の全国事務研究大会運営にあたる必要があることから、研究期間を平成21年度までの３年間とする。

○前回からの継続研究を望む班については継続する旨を明記したうえで、いずれも新たに希望を受け付ける。

○研究内容を例示し、選択の参考とする。

なお、現在は別に示す一覧表のような状況になっています。

現在の取り組みが完了する２年後、最終的には５つの班の中から一つを選んで、全体での研究協議を行う予定でいます。前回のまとめとなった平成18年度末には、指導助言者として福島大学の宮前先生をお迎えして「教育課程を効果的な予算計画で支えちゃおう」というテーマについての研究協議を行い、具体的な実践報告などを基に、以後の方向性などを確認し合いました。

今後も校長会、教頭会に協力を求め、指導助言をいただいたり、できれば研究協議そのものに参加いただいたりするなどして、より一層の連携を図りながら、そこを定着化の足がかりにしていきたいと考えています。

主題別研究の成果と課題

学校事務の課題はいくらでもあります。主題別研究がすぐに実践に移され、定着化して、実務的なたくさんの成果を上げているわけではありません。現実は「こうしたい」という願いをまとめる形で終わってしまっていることがほとんどかもしれません。

しかし、それは漠然としていた夢をより現実的な目標・手だてにすることです。それらをリソースとして持ち合わせておくことにより、必要に応じ速やかな対応ができるでしょう。結果を急がず、確実にまとめておくことが大切だと思っています。

たくさんのリソースを集約・管理するマネジメント機能こそ事務研の役割ではないでしょうか。会員の課題はそれぞれですしレベルを一定にするのは困難です。しかし全体を高めていくために、さまざまなレベル、観点のリソースを活用して実践に活かしていくことができたら、それはすばらしいことだと思います。

いずれ詳しくご紹介する予定ですが、田村市では教育委員会が招集する「学校事務検討・改善委員会」において、これまでの主題別研究等で繰り返し研究してきたたくさんのまとめを大いに活かして、いくつかの事務取扱要領等が制定されようとしています。文書や財務、備品管理、就学援助事務など、地区事務研での取り組みが正に「かたちに」なる瞬間であり、これらは主題別研究のすばらしい成果であると考えています。

一方、具体的な取り組み方ですが、班ごとに集まって研究を深めるとは言っても、実際には協議のみの時間とならざるを得ません。従って次の会合までには何らかの宿題が課せられることになります。それらを持ち寄ってまた協議を深める‥‥。研究活動がその時間だけで終わろうと思ってはいませんが、通年何らかの取り組みを続けるような形になってしまい、それも日常業務の傍らにすすめることですので、負担と感じることもあるのは事実です。研究活動の特性上やむを得ないことではあるのですが‥‥。

それも含めて、主題別研究が始まって以来相当の年数が経過しますが、活動スタイルは当初からほとんど変わっていません。果たしてこのままでいいのだろうかという不安を抱えているのも現実

です。もちろん内容的には格段の進歩があると感じていますが、自己啓発のためのより良いスタイルを模索しながら継続していきたいものだと考えています。

県事務研とのつながり

研究委員会では、毎年開催されている県事務研究大会の各分科会について、研究集録を利用して事前に予習する「事前研修会」も開催し、発表者の現状や課題と自分たちとの違い、そのための取り組み方などを把握したうえで大会に臨むようにしています。

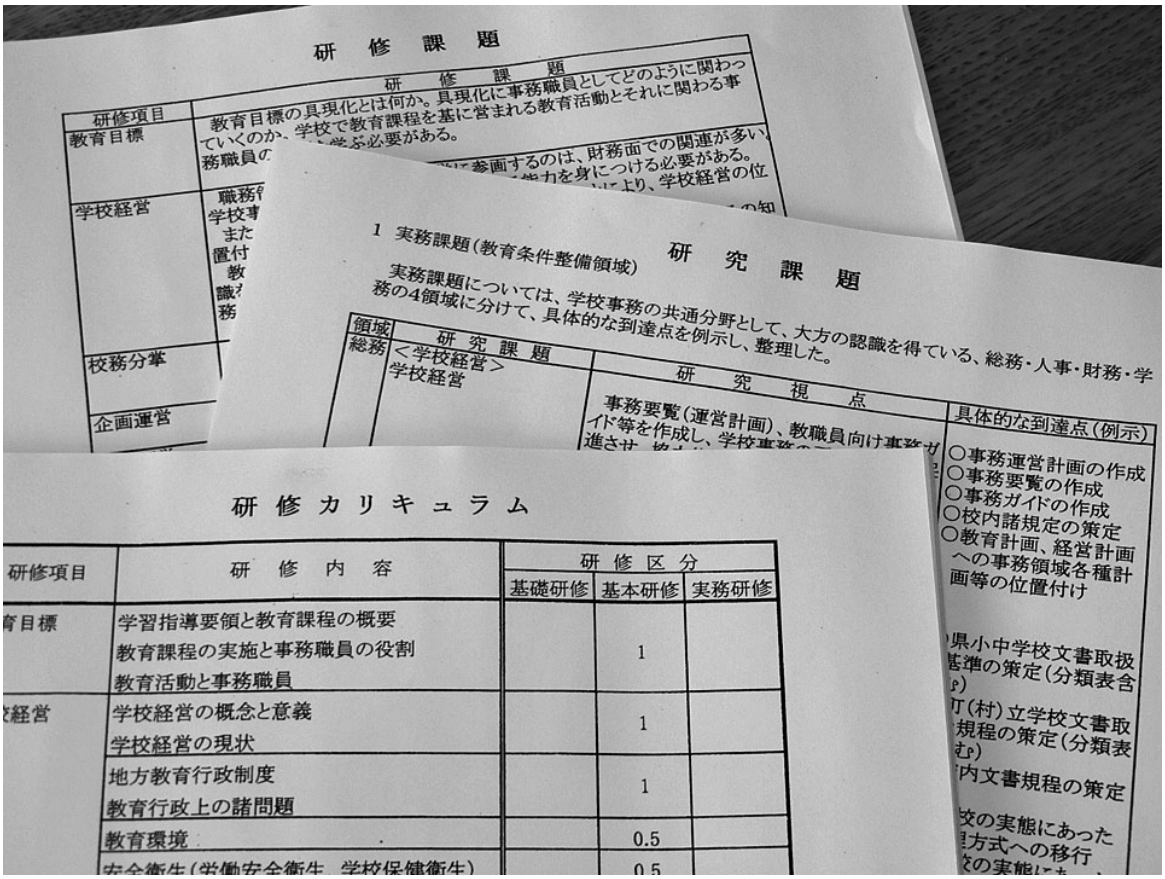
より深い研究協議につながりますし、それぞれの主題別研究などの参考にすることもできています。県や各地区の取り組み方と田村や各校での取り組み方とを対比させて考えることは、連携という意味からも重要なことだと思っています。

また、法令等の改正にあたって参考資料を提供したり、会員メーリングリストで情報を提供したりするなど、従来資料委員会がすすめてきた活動も継続しています。人事異動に係る関係書類等をWebページで提供し、広く利用できるような取り組みなどもすすめています。

さらに、前回ご紹介したように、新しい「研修・研究ガイドライン」策定にも取り組んでいます。県事務研長期研修計画とのつながりも考慮しながら、会員がより取り組みやすいものを目指しています。

さて、個々の課題解決の一方で、一定の知識習得のための研修活動も重要なものとなっています。次回は「まとめる活動」の研修委員会が担当する活動から、「カリキュラム研修」の取り組みを中心にお話をすすめる予定です。

[平成20年6月号]



第４回　こつこつこつこつ、夢の足音

学校事務研修を補完しよう

平成 20 年度における福島県公立小中学校事務職員の研修制度は次のようになっていますが、いずれも県教委が自治研修センターに依頼して一般自治体職員研修と同時にすすめる職能研修であり、残念ながら学校事務職員としての専門研修はもう何年も前になくなってしまっています。

○新規採用職員研修（前・後期）
○基本研修１（平成 14 年度採用者）
○基本研修２（平成４年度採用者）
○能力開発研修３（平成 10 年度採用者）

これ以外での任命権者研修はなく、教育事務所単位で行われる例もありますが、それは全校対象の説明会的なものになっているのが現状です。

田村地区事務研では、個々の課題解決と併せて資質向上も重要な取り組みであると考え、研修委員会が中心となって「まとめる活動」をすすめていますが､これは取りも直さず少ない研修の機会･内容を補完していくものとなっています。

その中心は「カリキュラム研修」と呼んでいるものですが、先にご紹介した「研修・研究ガイドライン」の「研修カリキュラム」に示された研修項目・研修内容について、研修委員会が全体を見渡しながら必要な項目を選んで計画を立てて講義形式ですすめる相互研修です。

具体的なすすめ方ですが、予算的なこともありますので、講師は可能な限り会員が交代で務めることにしています。カリキュラム以外の部分なども含めて、ある程度均等に割り当たるように、内容そのものも偏りがないように委員会が配慮しているようです。

講師は、示された研修内容に応じて資料を作成し、当日は１コマ 90 分をフル活用して講義を行う、ということになります。

集まってその時々の情報交換をすることも大切ですが、自分たちで計画を作りそれに沿って着実に取り組んでいくことにより、校長会・教頭会等の理解も得ながら、結果的に事務研の研修日を減らすことなくすすめることもできていると考えています。

カリキュラム研修の実際

１　平成 19 年度の研修内容

○扶養手当、旅費
○施設・設備
○通勤手当、単身赴任手当
○教育課程（教育事務所指導主事招聘）
○福利厚生

２　平成 20 年度へ向けて

○カリキュラム研修は平成 18 年度で一旦終了したため、暫定的に学校現場の課題に即して企画してきたが、県費事務の実務研修に偏りがちであった。20 年度から新しいカリキュラムに基づいた研修が始まることになるが、専門的研修と発展的研修とをバランスよく企画していく必要がある。
○事例を挙げての研修や実際に記入するような研修は理解度が高い。法令のみでなくそれらを基にした事例研修を多く企画することで資質向上が図りやすくなるだろう。
○コンピュータ研修については年間２コマ（４コマ分）確保しスキルアッププログラムに基づいてすすめているが、実際に操作しながらの実技研修を望む声が多く、基礎的な研修を継続していく必要がある。

３　平成 20 年度の計画

○平成 20 年度は別表に示すような研修・研究活動をすすめる予定です。

ほんとにこれでいいのか！

このカリキュラム研修がスタートした当時、個

人的にも大きな期待を寄せていました。同じ事務職員の目線で細かくまとめられた資料がとても頼もしく思えましたし、これがどんどん増えていくことによって、いずれ研修資料が体系化され、しかも相当なボリュームのものとしてまとまるのだと考えたからです。

資料はその後もきちんと提供されているのですが、お恥ずかしい話、私自身にそれらをきちんと整理・保管する能力がなくて散在してしまっているのです‥‥。

それはさておき、実は期待感の一方で当初は否定的な声も少なくありませんでした。さぁ次はこの研修、次はこの研修と休む間もないくらいの取り組みになってしまっているという印象があったのです。

それまでは、その時々に必要な内容について研修していたので、言わば「タイムリー」なことばかりだったのです。が、過去数年間の状況を振り返ると、どうしても時期的、内容的に偏りがあったという現実は明らかでしたし、それを見過ごすわけにはいきませんでした。そこで「研修・研究ガイドライン」に至ったはずなのですが、カリキュラムに沿って半年、１年、さまざまな分野について研修をすすめてくると、従来の「この時期にはこの内容を」という固定観念のようなものがそれを否定してしまうのでした。

委員会としても、それまでにない長期の企画でしたから戸惑いもありました。細かいカリキュラムの全てを消化しきれるのだろうかという不安感も常につきまといます。５年間でやりきろうというのはさすがにプレッシャーでしたから、どうしてもすすめやすいものから消化していった傾向もありました。その結果次第に企画しにくい状況へとすすんでいってしまったのです。我々だけでは如何ともし難いことや苦手なところなどが残ってしまうということです。

会員の不満と委員会の苦悩とが重く漂った時期でした。今となっては笑い話ですが、教える側も聴く側も、今日もつらい研修だった‥‥と思ってしまうのでした。５年で無理なら次の５年へとつないでいけば‥‥そう考えればもう少し当初の苦労は軽減できたのかもしれない、と当時の委員長は振り返ります。会員も同じように感じていたのでしょう、やがて「無理しないように」という意識が組織全体に伝わり、あせらず夢に向かってこつこつと確実にすすめようという研修スタイルが確立されたのだと思っています。

毎回全部を覚えることは所詮無理なことですし、基本的な部分だけでも、ひとつだけでも、極端に言えば知らなかったということを知るだけでもいいのではないかという最初の趣旨どおりでいいじゃないかと考えると、何かすすめ方の手順などがぼんやり見えてきた、少し視界が広がったような気がしてきました。

平成 20 年度 研修・研究活動コマ割表

月	午　前		午　後	
4月	総　会		方部①	主題①
6月	－		カリ①	方部②
7月	カリ②	主題②	ＰＣ① (2)	
9月	－		主題③	カリ③
10月	－		方部③ ～ ④	
11月	－		主題④	方部⑤
12月	－		カリ④	主題⑤
1月	－		方部⑥ ～ ⑦	
2月	カリ⑤	主題⑥	ＰＣ② (2)	

総会‥‥事務研総会　…２コマ
（午後は研究組織づくり）
カリ‥‥カリキュラム研修会　…５コマ
ＰＣ‥‥コンピュータ研修会　…４コマ
主題‥‥主題別研究会　…６コマ
方部‥‥方部別研修会　…７コマ
（10月・１月は方部別に開催）
コマ数計（６日分）　**… 24 コマ**

平成 20 年度 カリキュラム研修内容

月	内　容	講　師
6月	労働安全衛生法	滝根小・松本
7月	予算委員会	船引南小・伊藤
9月	学校組織マネジメント	古道小・石田
12月	教科書制度	岩井沢小・松本
2月	事務引継・履歴書整理	岩江中・穴澤 瀬川小・佐藤 船引南小・伊藤

経験の浅い会員ももちろん講師になる場合があります。それも決して無理をしないことが原則です。基本だけでもいいのです。ベテラン層はそれを復習の機会と捉えられますし、逆の場合は少し背伸びも必要なんだということを感じればいいのだし。それも当初の趣旨だったのです。

たかがアンケート、されど

研修にあたって資料といっしょにアンケート用紙が配布されます。研修が終わり次第記入して回収ボックスへ入れることもすっかり定着しました。内容はどうだったか、講義の方法は適切だったか、資料はわかりやすかったか、今後のカリキュラム研修に望むことは、そして自身の理解度はどれくらいか‥‥。

アンケートは簡単に記述するものですが、研修に対する姿勢、達成感やカリキュラム研修全体への意識などが確実に高まってきたと思います。自己申告の理解度はかなりアバウトではありますが、何％と数値化するだけでも不思議と意識が変わるものです。もちろん集計すると然るべき数値になるようで、それも不思議なものです。

研修委員会では、こうして会員の意識を把握し次の研修の参考にすることはもちろん、必要なことは会報やメーリングリストなどを通して会員へフィードバックしています。アンケートを実施するという形で PDCA サイクルを作っているわけです。

カリキュラム研修を振り返る

階段を一段一段しっかり上っていくように、ちょうど足音が響くように、こつこつと続けていくことが研修の大切なところです。一朝一夕にはできません。プログラムを作ることの意味はそこにあると思っています。単年度では難しい面もありますが、いかに長くつないで変えずに守っていくか、そういう取り組みも必要であると思います。

どのカリキュラムでも、講師役となった会員が「自分が一番研修できた」という話をしています。これはスタート時から現在に至るまでずっと変わりません。これまでにほとんどの会員がその役をこなしてきたわけですが、誰もが研修することの大切さを学び、資料のありがたさを実感し、教え合うことのすばらしさ、そしてカリキュラム研修の意味についても理解できたことが最大の成果であると確信しています。「こつこつ」というのは一歩一歩夢に近づいている足音なんだなぁと思うのです。

全員ですすめてきたカリキュラム研修ですが、細かいことを言えば内容によってはもう少し小さなグループあるいは中学校区単位などごとに、個別対応の研修も取り入れるような方法、例えば OJT の必要性なども強く感じています。

単発的に活動をすすめるとどうしても内容、人、時期的にもムリ、ムラが生じてしまいます。田村の活動はさまざまな点で体系的・組織的・継続的です。仮にポンと新しい活動を入れても、それが体系的に分類・吸収され、組織的に運営され、必要なら継続的に展開され、もし不要なら自然淘汰されるでしょう。それはこうしたカリキュラム、プログラムによる裏付けがしっかりしているからではないかと考えています。

また、委員会発足以来毎年必ず活動報告をしていますが、実施状況だけでなく必ず評価をし、次年度へ向けての在り方まである程度提案してきました。それらを共有しながら次年度の計画に移っていくのです。実はこんなところにも PDCA サイクルが確立していたんだなと感じます。地味ではありますが「まとめる活動」をしっかりすすめることは以後の事務研究会にとって何ものにも代え難い財産となっていくはずです。

さて、研修委員会では、学校事務の情報化を図るためにコンピュータの活用も推進しています。田村と言えばコンピュータというイメージもあるようですが、次回はそのスキルアップの方法などについてご紹介しようと思います。

[平成 20 年 7 月号]

第５回　プログラムにちりばめられた夢

情報と交流との夢

平成５年12月のとある土曜日、ノートパソコンをそれぞれが持参して、手弁当のコンピュータ学習会を開催しました。まだワープロ専用機が活躍していた時代でしたが、ワープロだけでなく表計算やデータベース、パソコン通信などを実際に体験しながら、月に２回ほどのペースで研修を始めたのでした。

コンピュータは、我々にとってとても便利なものになるし、そう遠くない将来ネットワーク化されて飛躍的に効率化されるだろう、そう思っていたわけです。どのように効率化できるか、できるだけ実務に結びつくような内容にすることも考慮していたように思います。月に２回というのは、４週６休制度の頃のことで、当時はぜひ研修の機会にしようという思いもあったように記憶しています。

集まったのは、役場職員や一般の方も含めて約10名。お互い目からウロコのような考え方に接することもあり、異業種の方々との交流はとても貴重なものでした。また、コンピュータに限らず日々の学校事務についての「よろず相談会」的な感覚もありましたから、直面している課題をいっしょに考えながらも、それこそ今で言うところの「ＩＣＴ」の夢を語り合うことができたのです。14～15年も前のことです。

グループワーキングの夢

約３年後、平成８年度の県事務研究大会において、田村地区ではコンピュータネットワークを利用したグループワーキングの具体例などについて発表する機会をいただきました。会場に電話回線を引き、コンピュータをＬＡＮケーブルでつなぎ、その画面を液晶プロジェクタで大きく映し出して紹介するという今では当たり前の発表スタイルでしたが、当時は何か衝撃的な発表でもありました。

全てを一人で処理しなければならないのではなく、中身を分担してひとつにまとめていくようなグループワーキングをすすめることで、効率化はもちろん仕事も自分自身もクオリティ向上につながっていくだろう、という発表内容でした。

この発表は意外な人的ネットワークへと発展し、教員、ネットワーク事業者、コンピュータメーカー、パソコン通信利用者などと広域的に情報交換をするようになり、やがてボランティアで学校にネットワーク環境を整備する「ネットディ」へと結びつきました。これで子どもたちもインターネットを利用できる‥‥、あのとき語った小さな夢のひとつが叶った瞬間でした。

全く異なった業種の人たちが集まり、得意とする仕事を分担してネットワーク環境を提供する「ネットデイ」ですが、コンピュータやネットワークの知識・技術がなくても、例えば弁当の手配をして湯茶の準備をする、それも重要な役割なのだということを痛感させられたものでした。

その後は公共施設のネットワーク化が一気にすすみました。県教委が管理する「ふくしま教育ネットワーク」と自治体が管理する「地域イントラネット」とが接続され、地区内すべての学校でインターネットを利用できるようになりました。

PC スキルアッププログラム

コンピュータも一人１台の時代になり、基本操作やソフトウエアの使い方をぜひ教えてほしいという声が急増しました。

そこで、これまで培ってきたさまざまなノウハウを、地区全体の取り組みに活かすことにしました。コンピュータ研修としての内容をカリキュラム的にまとめ、実技研修を推進しようと作成したものが「PC スキルアッププログラム」というものです。

1　スキルアッププログラム

ワープロ、表計算、データベース、その他（ネットワーク等）の各領域について、事務職員として身に付けたい内容などを、基礎から応用まで一覧化した。

2　マニュアルプログラム

単位項目ごとに、その内容を具体的な資料として冊子化し、ある程度独習できる資料として整備することにした。

3　サポートプログラム

コンピュータに明るい会員を領域ごとに２名ほど割り当て、講師やマニュアル資料作成の中心となる他、要請に応じ可能な範囲で支援していくこととした。また、会員一人ひとりがサポーターであるという意識で取り組むことも確認した。

このプログラムに基づいて実技研修をすすめるのですが、以前ご紹介した主題別研究と同じように、自分の課題や目標に近い部分を選択して受講するという仕組みを基本にしています。自由に選んで実施したこともありましたが、講師役になる会員に限りがありますから、１班 10 名程度というのが妥当です。できるだけ幅広く要望に応えたいと思ってはいるのですが、そこは課題でもあります。

班編成の前に、まず会員に研修の概要を伝えます。会員は具体的な要望も含めて希望する単元を報告します。それらを取りまとめて講師担当者と研修内容を調整しながら実施します。前回希望に応えられなかった内容についても考慮したり、何度か同じ単位・単元を研修したり、柔軟にすすめています。

資料については、市販のマニュアル本などを各自準備することも考えましたが、自作の方が臨機応変に対応できるメリットもあります。無理のない範囲でと言いながらも催促して講師担当者に作成していただいています。全部で 20 単元・60 単位ありますが、できるだけ単元ごと３単位ずつ作成してきました。

独習するという意味でもマニュアルの整備に力を入れてきたわけですが、残念ながら整備率は７割程度でしょうか。しかし内容によっては関連する単位・単元に含まれている例もあり、その他の領域を除きおおむねカバーされていることでしょう。

ひとりで学ぶ、みんなで学ぶ

コンピュータ研修は、半日・２コマ分を確保します。約３時間たっぷり実施するのですが、あっという間に過ぎてしまいます。その中で３単位＝１単元分の内容を研修していますが、ひととおり単元全体を見ておくと、マニュアルを見ながら独習したり、わからないところはサポーターに照会したり、自己研修がすすめやすくなると思っています。

資料や講師に頼るだけでなく、お互いに教え合いながらすすめる様子は、とても頼もしく感じられるものです。また、プログラムを見るとどれも受講したいという思いもあり、研修の機会が増えることが望まれています。

実際には、年に２回程度確保するのがやっとです。従ってこのカリキュラムも全て消化するのは容易でありません。が、少しずつ整備されたマニュアルが全会員に提供されることで、それぞれのペースで研修することも可能です。何をどこまで

理解できているかまでは把握できていませんが、自己研修意識の高まりと相まって、一定の底上げにつながってきたと思っています。得手・不得手はもちろんありますが、コンピュータを利用した効率的な事務処理の方法だけでなく、ネットワーク化による弊害なども学び、そのうえで電子メールの利用も大いに高まってきました。

グループで学び、ひとりで学び、メールなどを利用して全員で学ぶ。当たり前ですがとても大切なことだと思っています。

十数年前、個人的に始めた学習会でしたが、集まっているうちに「事務研にこんなことも取り入れよう」という話も当然出てくるようになります。コンピュータだけではないんだ、役員だけで事務研を運営していくのではないんだ、自分たちがつくっていくものなんだというそれぞれの意識・意欲が高まり、そして広がったように思います。

プログラムもデザイン

ネットディの時に、ある大学の先生から「情報をデザインすることが大切なんだ」という話をお聴きしました。我々の仕事も情報そのものについても、わかりやすく、使いやすく、親しみやすいものにしていくことが必要なんだと妙に納得したものです。もう一歩踏み込んでより具体的にできたら、それも立派な情報デザインだろうと思います。

そういう意味もあって、スキルアッププログラムには「ことばでのデザイン」にもこだわりました。何か期待感のあるキャッチコピーが、意欲をかき立ててくれることでしょう。がさつながらも単位プログラムひとつひとつに夢をちりばめたつもりです。それをかたちにするのは会員一人ひとりの思い・意欲です。使えるようになることの喜び、できることの楽しさ、それらがリアルにわかるからコンピュータ研修のニーズは高いのでしょう。

このプログラムも一定の期間を経ました。全てを消化できたわけではありませんが、研修・研究ガイドラインの改訂に合わせ、見直す時期かとも考えています。マニュアルの改訂も必要になってきます。

ただ、学校事務の情報化を推進するというベースは変わりません。ワープロ、表計算、データベースにとどまらず、インターネットをどのように活かしていくか‥‥。次回は情報化に関する活動全体の計画についてお話しする予定です。

［平成 20 年 8 月号］

第６回　夢が叶った!?　情報化すすめ方プラン

夢をつなぐ一本のヒカリ

前回少し触れた「田村広域イントラネット」は、田村地域の公共施設を専用の光ファイバーでつなぐ高速ネットワークです。平成 14 年度に整備計画が示されましたが、地域内全ての小中学校も含まれていたことから、田村地区事務研では情報化推進委員会を設置して対応することにしました。コンピュータに関するさまざまな活動が増えてきていたことも委員会設置の一因だったと記憶しています。

広域イントラネットは平成 15 年度後半に運用を開始しましたが、小中学校は県教委の「ふくしま教育総合ネットワーク（以下ＦＫＳ）」を経由してインターネットに接続する「教育系」ネットワークを主として利用することになりました。どの学校でもインターネットを利用できるというのは、子どもたちはもちろん我々にとっても夢が叶ったような出来事でした。

それまでの活動から、電子メールによる情報交換活動がたいへん有効であると考えていたため、全会員参加のメーリングリスト運営から始めることにしました。「田村事務研メーリングリスト」を開設し、併せてホームページによる情報発信を目指して「田村事務研 On-Line」という Web サイト運営もスタートさせました。いずれもＦＫＳの全面的な支援により可能となったものです。

前号でもご紹介したように、それ以前からの自主的な活動により比較的スムーズにすすんだと思いますが、事務職員が専用的に利用できるコンピュータやネットワーク環境などが整い、足並みが揃うまでには１年近くかかりました。

少しずつではあっても、何か強い思いが一本のヒカリで確実につながっていくような気がしたものです。

情報化すすめ方プラン・３つの柱

その間に、学校事務の情報技術化等を推進するためにも、研修・研究ガイドラインにある「情報管理」の内容を拡大して取り組むような計画を策定して活動のベースとすることにしました。策定当時は「IT 化」という時代でしたが、目指していたのは正にコミュニケーションやシェアリングなども意識した「ICT 化」だったのです。

それを「情報化すすめ方プラン」と名付け、校長会等の理解･協力を得ながらすすめていますが、以下のように３つの柱で構成されています。

１　インターネットの利用促進

（１）ホームページの開設・運営

○アクティビティ、アーカイヴ、コミュニティなどをテーマにしたコンテンツ

（２）電子メールの活用

○コンタクト、フレンドシップ、トレーニングなどを意識したメーリングリスト

（３）ネットワークの利用

○ファイルシェアリング、グループワークなどの推進とネチケットの習得

２　コンピュータ活用に関するスキルアップ

（１）スキルアッププログラム

○ワープロ、スプレッドシート、データベースを基本に

（２）サポートプログラム

○リーダー、グループ、サイトを設定し、自らもサポーターに

（３）マニュアルプログラム

○１単元３単位ずつ整備し自己研修資料にも

３　学校事務の IT 化

（１）ネットワーク利用規程等の策定

○規程案を参考に各校で利用（現在はほとんどがＦＫＳ案を準用か）

（２）各種ソフトウエアの開発と利用

○旅費大福帖（学校事務 2001 年１月号）、

田村市備品管理システム、各種ファイルの共有等

（3）県事務研との連携

○県事務研情報委員会（HP グループ）との相互協力・支援等

田村のＭＬがめざすもの

「情報化すすめ方プラン」に基づく活動のうち、電子メールとりわけメーリングリストの運営は、人も活動も連携させる「つなげる運営」として、事務局業務の効率化という点からも、活動の仕組み・補助的基盤としてたいへん重要な役割を担っています。

現在田村地区事務研では別図のようなメーリングリストを運営していますが、それぞれ次のような特性があります。

1　全員参加のメーリングリスト

全会員登録の「田村事務研メーリングリスト」がベース。全体でのさまざまな情報交換をはじめ、効率的な学校間連絡網としても機能。実務的な疑問やコンピュータ操作の質問など幅広い OJT にも。同様に、市町ごとのメーリングリストを設け、その中でより具体的な課題などについて協議するなど、焦点を絞った活動に活かすことが可能。

2　組織運営的なメーリングリスト

それぞれの運営組織ごとにメーリングリストを設け、必要に応じて活用。実際の会合を減らしながらも中身の濃い協議が可能に。また、活動のベースとなる委員会ごとのメーリングリストも、少ない会合を補完しながら企画をどんどん練り上げる場に。

3　特設的なメーリングリスト

活動がより効果的・効率的にすすめられるよう、必要に応じてメーリングリストを特設運営。また、全く別に私的なメーリングリストを設け、通常業務中には利用できないようにしながらも、親睦を深められるように配慮。

これらによって、縦あるいは横だけになりがちだった連携がクロスするようになり、さらにそれらが階層化しているので、情報や課題の共有化が格段に向上しました。

メーリングリストを利用していると、他の事務職員が何で困っているのか、何をしているのかを悟ることもできます。実は自分も聴きたかったことで助かる場合が多々あります。自分（の学校）に置き換えて考えやすく、結果的にお互いのノウハウがどんどん伝わっていると思います。今聴きたいこと、今必要なもの、実にささやかなことですがそれが満たされる‥‥そんな夢も叶っているのかもしれません。

ＭＬとＯＪＴ・ＯＬＴ

従来、他校の様子や個々の取り組みなどを知るのは事務研究会で集まったときくらいでした。わからないことがあれば電話に頼っていたわけですが、1 対 1 のやりとりでは解決しないこともあり、場合によっては誤ったことが伝わったきりになることも予想されます。しかしメーリングリストを利用することによって一度に複数の相手に照会しさまざまな考え方・事例に触れることができるようになるなど、その運営には次のようなメリットがあると思われます。

1　**容易性** ‥‥ 送信先はひとつでも全員に配信される

2　**配意性** ‥‥ 電話と違って相手の都合を妨げない

3　**多様性** ‥‥ 複数の目に触れることでさまざまな事例が返ってくる

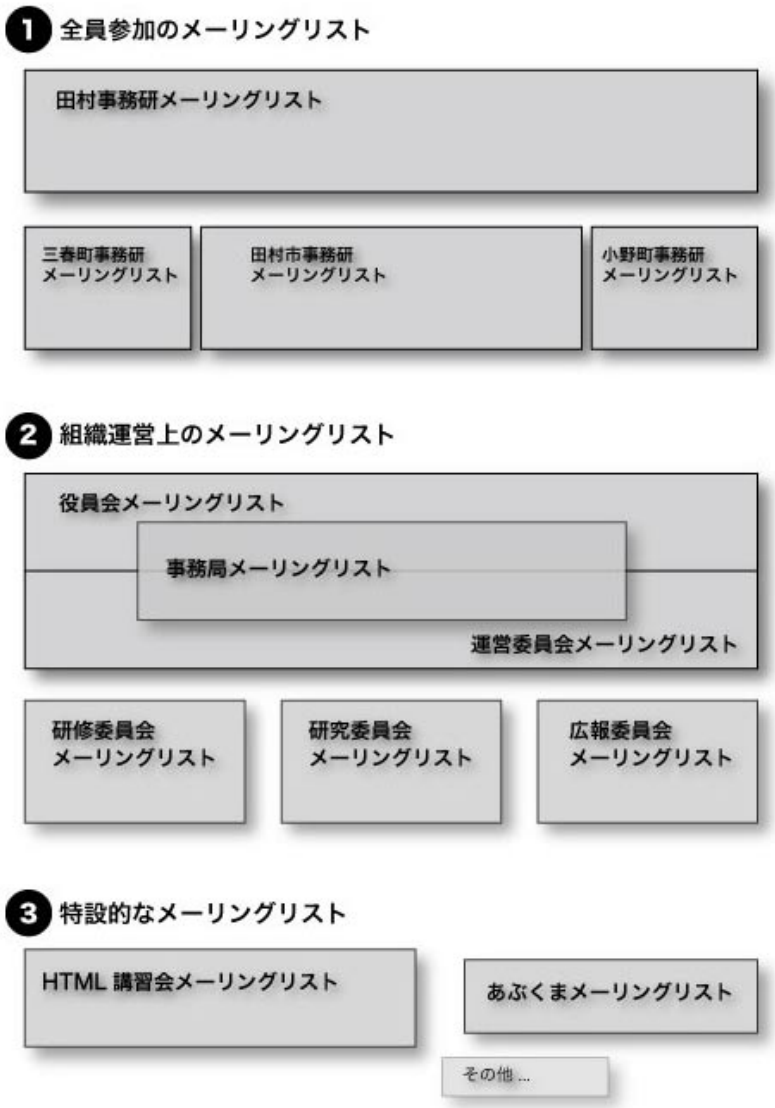
4　**発展性** ‥‥ 複数の回答・返信がさらに次のステップにつながる

5　**即時性** ‥‥ 紙媒体と違いデジタルデータをすぐに配信・入手できる

6　**共有性** ‥‥ 話題やデータファイルを全員で取り扱うことができる

7　**効率性** ‥‥ これらを全員が同時進行できる

共同実施や学校間連携による事務運営ではOJT効果が期待されますが、これらをその一端とも言える「OLT（On-Line Training）効果」と考えれば、より効果的な取り組みにすることができるだろうと思います。全会員が電子メールを利用できるだけでなく、それを組織的に利用するメーリングリストを運営することによって、さまざまな課題に広域かつ高速に対応することができます。職場に居ながらにしてみんなでやっているという感覚やこれまでにない連携感が高まるだろうと思われます。メーリングリストを運営組織の機能として位置づけていくことはたいへん有効な手段であると感じています。



コミュニケーションの大切さ

もともと「パソコン通信」などを利用しながら、遠隔での情報・ファイル交換の利便性などを感じていた経緯があります。ホームページもずいぶん早い時期に仮設するなどしていましたし、前回ご紹介したようにコンピュータ研修も早くから取り組んできたことなどから、「情報化すすめ方プラン」は、それらを体系化しながら長期的な視点で計画としてまとめたものでもあります。策定から５・６年経過することから、予算面、機能面、運営面などさまざまな観点から再点検する必要があります。

もちろん、個々のスキルにも差はあります。ひょっとしたら、ついて行けないと感じている人がいるかもしれません。そこも再点検が必要です。ただ、メーリングリストがよく動いているのは、ITよりICTであることがよく理解されているからだと思います。

コミュニケーションの大切さを誰もがよく承知しているのは、20年間変わらず続けてきた「つたえる活動」に起因しているものと思われます。次回は「会報あぶくま」を中心とした広報活動の取り組みについてお話しする予定です。

［平成20年9月号］

第７回　つたえよう今を、届けよう夢を

あぶくまへの思い

この２月、会報「あぶくま」が創刊 100 号を迎えました。実に 22 年もかかっているのですが、田村地区事務研の長い歴史の中で、広報活動とりわけ会報発行だけは変わらず継続されてきたのです。約 20 年の間には社会も学校事務も大きく変わってきたのですから、会報ももちろん変わってきたはず‥‥ですが、創刊号も 100 号もあまり変わっていないような気もします。

芸がないと言われればそれまでですが、淘汰されることなく現在に至っているということは､「あぶくま」が「あぶくま」であり続けるために、その時々のニーズに応じて中身や運営方法などを変えながら、粛々と取り組んできたからこそと考えています。

昭和 61 年６月、会報第１号巻頭あいさつの中で当時の会長は、折しも施行された男女雇用機会均等法に触れ、次のようなことを書き記しています。

○責任ある業務遂行のため、これを機会に職務を再点検し、立場を理解して協力し合おう。

○身近に話し合いながら、趣味や特技も活かして活動をすすめよう。

○来るべきＯＡ･コンピュータ時代に対しても、男女の別なく積極的に取り組んでいこう。

当時の会長が思い描いた夢のごく一部かもしれませんが、我々は少しずつその夢を実現してきたと思いますし、その夢が変わらず今も受け継がれていることを誇りにさえ思っている次第です。そうした思いを脈々と伝え続けてきたのが会報なのかもしれません。

「あぶくま」という名称は、田村地区の位置する阿武隈山系にちなんだものです。その山並みをイメージしたタイトルロゴがずっと変わらずに使われています。一方で意識は大きく変わり、今は活動の様子などが中心となっていますが、当初の内容は親睦会的な色が強かったように思います。ただ、その人となりをお互いに知ったうえで改めて実践を見ることによって、より詳細なものが見えてくるような気がしたものです。

あぶくまが果たしてきたもの

第１回目でお話ししたように、研究推進委員会が設けられ新しい活動が展開され始めた直後に広報委員会が追加設置されました。さまざまな活動の様子をコンパクトにまとめてできるだけ早く会員に伝え、次の活動につながるようにしました。会報発行以降さまざまな実践の存在に気づき、まるで水を得た魚のように研修・研究活動が展開されていったように記憶しています。

振り返ってみれば、意外と知られていない地域のことについても取り上げるようにしたことにより、それぞれの課題やその背景などもある程度把握できたのだろうとも思います｡いずれにしても、会報は会員同士をつなぐ情報網として、現在のコンピュータネットワークと同じような機能を果たしてきたのです。もちろんコミュニケーションの重要性も忘れてはなりません。

また、会報は年間数回発行してきましたが、年度末には全会員が自由にそれぞれの思いを綴る「特集号」を発行しています。さっと読み流してしまえばただの文集ですが、趣味や出来事などを通して学校事務を見直しているところなどが少なくなく、つまり学校事務を客観的に捉え考えることができます。年度末の忙しい時期ですから書くことは確かにきついのですが、自分を見つめ直すチャンスであり、他人の成果や課題を見ることによって、

○自分の考えを客観的に捉えなおすことができる。

○それぞれの課題を共有することができる。

○おもしろいアイディアが生まれてくる。

と思います。

これはつまり、新しい活動へシフトしやすい状況ができるということです。委員会発足以来、その活動報告も毎年必ず掲載していますが、組織的な研修・研究への発展性、そういう下地が形成されるのだと思っています。とにかく若い会員ばかりでしたが、ものごとを「まとめる」ということを意外に気にしなくなったような気がします。それぞれが課題を見つけ外に伝えていこうとする姿勢、これは活動への大きな弾みだったと思いますし、こうしたところにも事務研活動の PDCA サイクルがしっかり確立されていたんだなぁと感じるのです。

じむ Planner とサイト運営

広報委員会では毎月の給料日を目安に翌月の事務カレンダー「じむ Planner」をメールで配信するという取り組みも行っています。きっかけは「翌月の提出書類等のリストをまとめて提供できないか」という要望が会員メーリングリストに流れたことでした。

どうせなら主な会合等の予定も入っていた方がいい、どうせなら 1 ヶ月のカレンダー式になっていた方がいい、毎月の情報提供なら広報委員会が引き受けましょうかと話はすすんだわけですが、実務に直結する資料としてたいへん助かっています。興味のある方は次の URL にアクセスしてご覧ください。

○ http://www.tamura-jimu.gr.fks.ed.jp/arch/jplanlist.html

組織改編前は情報化推進委員会が担当していたホームページ運営も、広報委員会が担当することになりました。しばらく更新されていないページが少なくなく、サイトリニューアルを検討していますが、残念ながらなかなか手が回りません。

ホームページ運営の課題も含めて大きな見直しが必要だと考えていますが、当面は必要な部分のみ対応しています。

あぶくまのリニューアル

さて、その会報も第 101 号を最後に紙での提供を終えることにしました。年間 4 回程度の発行でしたが、どうしても記事の鮮度は落ちてしまいます。できれば毎月定期的に発行したいところですが、編集や印刷、配布までの流れを考えるとそれもなかなか厳しいものがあります。

そこで、細かい編集の時間を極力減らし、印刷や配布の手間・暇もなくしてこの 6 月から毎月発行することにしました。いわゆるメールマガジン式の会報とし、記事の切り抜き情報を提供するというものです。名付けて「あぶくま Clip」。

記事の本体については、Web サイトの URL だったり、メーリングリストメールの番号だったり、PDF ファイルなどを添付したり、内容によってさまざまですが、実に 22 年ぶりのリニューアルとなります。電子化の動きはこれまでも何度となくあったのですが、メールの利用が定着したことなども考え、移行に踏み切ったということになります。20 年以上続いている取り組みでしたから、委員の思い入れは相当なものだっただけに、これは大英断だったと思います。

いずれにしても会員にさまざまな情報が確実に伝達されているということが重要だと思います。広域イントラネットの整備によりネットワーク化がすすみ、インターネットを利用できるようになったことは大きなポイントです。情報収集の意識が高まり、またタイムリーな課題解決の手段としてメールを利用している現状も特筆に値すると思います。こうした情報伝達の活動とそのシステムが今後の軸になってくると思われます。相互支援の観点で「つたえる活動」が推進されれば、会員誰もが助かると同時に、我々の思いはしっかりと受け継がれていくことでしょう。

新たな広報活動に向けて

事務研のような任意の研究組織がまず考えるの

は、会員をひとつにまとめるための広報活動・会報発行かもしれません。それを否定するものではないのですが、その方向だけですすめればすすめるほど、内側に内側に入り込んでしまわないかと心配します。

平成 17 年度の県事務研究大会記念講演で、静岡大学の藤原先生が「応援団を作っていく必要がある」とおっしゃっていましたが、我々の広報活動は確かに自分たちのためだけのように思えて、頭をガーンと殴られたかのような衝撃でした。

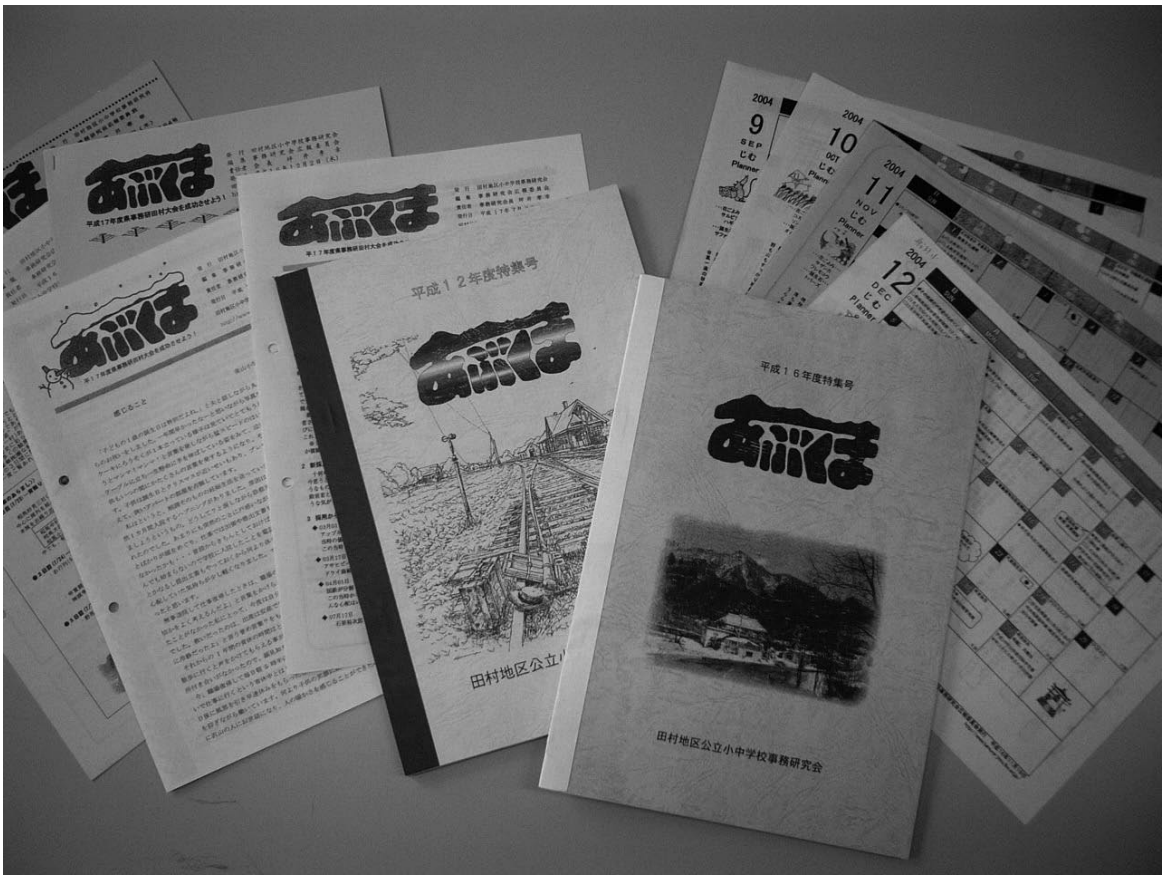
組織改編を機に会員に対してアンケート調査を行ったところ、意外にも広報委員会に対する期待が大きくなかったことには少々驚きました。が、決して内容や運営に期待していないということではなくて、20 年以上変わりなく続けてきただけに、空気や水のように当たり前のものとなっていたことも、結果から伺い知ることができました。

新しい広報委員会は「つたえよう今を、届けよう夢を」という活動テーマで取り組んでいますが、こうした背景などから、その広報活動も誰を対象とすべきなのか改めて検討する時期であると考えています。

会員への情報提供をこれまでどおり継続していく一方で、外側に向けて我々の思いを確実に伝えていく必要があるでしょう。広報活動は本来外側に向かってすすめられなければなりません。具体的な取り組みの様子、その成果と課題、そして我々が目指しているもの・思い・夢をしっかりと伝えていくことにより、学校事務が理解されていくのだと思います。それが「つたえる活動」の本旨ではないかと考えています。

次回はその具体的な取り組みなどについてご紹介する予定です。

［平成 20 年 10 月号］



第８回　積み上げるちょっとの夢

広報活動を考える

今夏の全事研福島大会、いかがだったでしょうか。このお話が皆さんのお手元に届く頃には多少時期外れの気もしますが‥‥。たくさんの実践例や研究のさまざまなヒントを全国各地に持ち帰っていただいたことと思います。そこから大きな展開につながることを期待すると同時に、その種となった各校での取り組みをご提供くださった分科会担当支部の皆さんに、改めて深く感謝したいと思います。ありがとうございました。

さて、ここまでの話を少し整理しておきたいと思います。田村地区事務研では、活動の柱を次のように大きく３つに分けてすすめています。

1　**まとめる活動**（研修委員会）
2　**すすめる活動**（研究委員会）
3　**つたえる活動**（広報委員会）

それぞれの委員会が活動のベースとなる「研修・研究ガイドライン」を基に年間の活動計画を立てながら取り組んでいくわけですが、それらを推進するためのさらに具体的なプログラムも必要だと考え、改訂や追加整備を検討しています。

前回お話ししましたが、田村地区事務研の広報活動は、会報を通して取り組みの様子などを伝え、会員の親睦を図りながら事務研活動に対する意識を高めていくことが大きな目標でした。二十数年前、研究推進委員会が創設されたばかりの我々は、会員同士のつながりによってそれぞれの取り組みを知り、刺激し合って、そうして高まっていくおもしろさをようやく見つけたような状況だったのだと思います。地区事務研がどんどん活性化していく様子が会報を介して手に取るようにわかる‥‥そんな気がしました。以来何はともあれ会報だけは絶やしてはならない‥‥そう思って取り組んできたのです。

しかし、会報は一方的に伝達して終わりになってきたようにも思えます。印刷された紙を配布するだけでなく、取り組みの様子も具体的な実践内容・成果などもデータベース化して体系的にまとめておく必要があるのではないでしょうか。実はそれを比較的容易に実現させていくのが「ブログ」というツールではないかと考え、新しい広報活動を少しずつ取り組み始めたところです。

たむら事務研ちょっとニュース

田村地区事務研では自分の周りの人たちを応援団にしていこうと考えています。隣の学校の事務職員だって応援団ですし、校内の全教職員が応援団ですし、地域や一般の方々も応援団です。どうしたら応援団になってくれるかと言えば、自分たちの取り組みを知っていただき学校事務を理解していただくことだと思います。これまでは自分たちだけで、ともすれば一人で何とかしようとしてきたわけですが、やはり外側に向けてこまめな広報活動を展開していかなければなりません。我々が取り組むべき広報活動は、本来内側よりも外側にウェイトを置いていかなければならないのではと考えます。

そのためには、自分たちの活動をわかりやすくまとめるということだと思います。そうすることによって焦点化され、成果と課題が明確になり、理解されやすくなるでしょう。そこで「たむら事務研ちょっとニュース」というブログサイトを立ち上げて、我々がどんな活動をしているのかを伝えていくことにしました。まだまだ本格稼働とは言えないのですが、ときどきご覧いただければと思います。

○ http://hiromaru.typepad.jp/tamurajimu/

記事掲載にあたっては「エントリシート」というものにまとめて報告することにしているのです（もちろん様式は自由です）が、それを書くことにより、どんなことをしたか、何ができたか、今度は何をするべきか、それぞれの思いも含めてコ

ンパクトにまとめられます。それを逐一公開していくわけですが、カテゴリー別に追うこともできるので、いずれそれぞれの経過などもわかりやすくブラウズできるのではないかと思っています。

そう考えると決して外部だけに向けているものではなく、自分たちのまとめになっているということに気づきました。自分たちも見る・読むことにより、経過や課題まで共有することになって、個々の課題意識へとつながっていきます。

夢を積み上げる

全国大会の際に広報を担当した仲間が、速報発行を終えてこんな話をしてくれました。

「まるで新聞記者のような気持ち・目線で様子を伝えようとしていたんですが、実は主催者側の立場でその趣旨なども織り込みながら書かなければならないんですね。自分たちの意識がちょっと違っていたことに気づきました。」

広報とはつまりそういうことなのですね。自分たちの取り組みの様子を伝えることに変わりはありませんが、それはどうしてなのか、何のためか、どうしたいのか、といった組織としてのビジョンがなければ、その思いは外側に伝わっていかないのです。

わたしたちの広報活動はどうでしょう。記者の目線であることは大切ですが、そこに組織としての主観的な思いが込められているでしょうか。入っていなければ、まだまだ事務研内部の雑多なリソースでしかないと思います（でも大切なことです）。入っているとしたら、それは外側に向けて発信できる我々のビジョンになるものと思います。

そしてもうひとつ。それを誰に伝えるかです。せっかくのそれが事務研という殻を破らないうちは、われわれの栄養にはなるのでしょうが、いつまでも栄養を蓄えているばかりで「メタボ体質」間違いなしです。殻を破って外側に出してやることで、体質は格段に改善され、汗やストレスまでも発散し、きっと心身共にたくましいものになっていくことでしょう。

研修および研究活動については、どの地区でも会員が中心になりどんどん進められていることでしょう。では広報活動はどうか‥‥。どうしても広報委員会任せになりがちで、大半の会員は会報などを通して情報を「受信する」側になっているような気がします。組織創生期の広報活動ならまだしも、然るべき成果を上げるほど活動が熟成されてきた段階では、こちらももう少し主体的に取り組んでいく必要があると思います。

田村地区も同様で、会員ひとり一人がこの「ちょっとニュース」を情報発信のベースにしてほしいと考えています。会報やホームページも同様で、「広報委員会が運営するもの」ではなくて「会員がつくっていくもの」であり「発信する」側になる必要があります。会員がそうした意識になってほしいと思いますし、各委員会も（三役も）そうあってほしいと考えています。

情報化時代の今は小さな事例よりも大きなビジョンや計画の方が目につきやすいし、注目されやすいかもしれませんが、それは結局のところ小さな取り組みを一つひとつしっかり積み重ねていくことに他なりません。その小さな取り組みをわかりやすくまとめて広く報じることが広報です。研究実践と同じように私たちの夢をしっかりと積み上げていくことなのです。

そうした活動によって、個人だけでなく地域全体の資質向上につながります。学校事務が理解され質の高い学校事務が展開されます。学校事務の確立によって、学校の基幹である事務運営機能が安定して提供されることになります。それは子どもの学びや育ちを常に支援できるということだと思いますが、それが「学校経営スタッフとして参画する学校事務職員の役割」ということではないかと考えます。

広報も連携していくとき

今後は、学校事務について「外『へ』伝える」ことです。外側に向けた広報活動をすすめていか

なければなりません。学校事務の課題や夢を学校事務職員同士で共有し、その解決や実現に向けた取り組みを我々はしてきました。が、その夢をぐっと近くにたぐり寄せるためには、学校事務職員以外の理解が必須なのです。そこに目を向けなければなりません。

それを「外『と』伝える」のです。学校事務の課題はすでに我々だけでは済ませられない時代になってきています。学校事務に限らず学校教育全体がそうでしょう。教員にとっても教育委員会にとっても、もちろん保護者や地域にとっても、それぞれの課題を実現していくためにはお互いに力を合わせていかなければなりません

また「外『も』伝える」ことがポイントでしょう。繰り返しになりそうですが、学校事務の現状や課題は、学校教育全体の現状や課題を踏まえなければ理解されにくい面があります。ですから、我々も学校教育全体を見渡しながら学校事務を考えなければなりませんし、そこを学校事務の「夢」の切り口にしていくべきなのだろうと思います。

こうした考え方による広報活動の具体的な取り組みを、「ちょっとニュース」でご紹介しています。「『開かれた学校づくり』の一端となることを願って」という5回シリーズのエントリーです（「カテゴリー」→「28研究実践」をクリック）。ぜひご覧いただければと思います。

いずれにしても、事務研を超えての連携が必須です。市町村合併、学校統廃合なども含めて考えると、地教委と連携して取り組むこともたいへん重要になってきます。次回はその具体的な取り組みの例をご紹介したいと思います。

［平成20年11月号］

第９回　夢のスクラム

結いの精神から

田村地区事務研活動が活発にすすめられる背景には、地教委はもちろん校長会、教頭会等関連団体の深い理解があります。事務職員未配置校、産休・育休等への期限付職員補充校等が少なくないこの地域では、学校事務のノウハウを共有しながら互いにサポートし合って学校事務運営をすすめていかなければ、学校運営そのものに支障が生じかねません。同じ地域の中で助け合う昔ながらの「結い」の精神が、事務研の中に深く息づいていることが理解されているのではないかと思っています。

また、一人職であるが故に研修・研究が必要であることは言わずもがなであり、各種団体の行事削減も叫ばれる中、事務研活動についてはおおむね継続して活動がすすめられるよう、取り組みを後押し・支援してくださっているという経緯もあります。それに応えるべく、活動計画などを策定しながら研修・研究を深め現在に至っているわけですが、さまざまな成果を各校において実践すること、フィードバックさせていくことこそ「結い返し」になるのだろうと思っています。

さて、田村地区内で合併した「田村市」での取り組みについて、少しご紹介することにします。

田村市は４町１村による合併でしたが、３月１日付というその時期が現場にとっては混乱の大きな種だったように思えます。旧町村ごと２月末日までの決算処理､新市としての３月暫定予算運営･決算処理、合併による事務処理とさまざまな年度末事務処理、４月新年度暫定予算のスタート、通常の年度当初事務処理････。それらをすすめるうえで旧町村の処理方法が統一されていなかったことなどから混乱し、まるで台風の最中に船出をするかのようでした。

合併を前に、事務職員レベルでの業務のすり合わせなどをする機会はありませんでした。校長会等の代表による数回の協議があった程度と記憶しています。我々が心配していた以上に校長先生方が相当な不安を抱えていたのではないかと今さらながら思います。

こうした中で、何らかの対策をと校長会を通して働きかける一方、正に「結い」のように支援し合いながら一時期を乗り越えてきた次第です。

学校事務検討・改善委員会

田村市の誕生により、地区事務研とは別に市単独の事務職員組織が必要になってきました。相互連携の体制を整えながら、混乱する学校事務のすすめ方について検討し改善を目指すべく、当面の課題を５つに絞り分担して取り組んでいこうという確認のもと「田村市公立小中学校事務職員会」を発足させました。

それを受け皿にするような形で、教育委員会、校長会、教頭会と連携し、学校事務のさまざまな課題について検討を加え具体的に改善をすすめるための組織を設置するに至りました。それが「田村市学校事務検討・改善委員会および検討部会」です。

市教委学校教育課長、同教育総務課主幹、同学校教育課主幹、校長会代表、教頭会代表、事務職員会代表数名による組織の「検討･改善委員会」と、具体的な協議･検討をすすめる５つの「検討部会」とで構成されています。検討部会には各課題を担当する教育委員会職員と各校事務職員とが分担して所属します｡校長会と教頭会､教育委員会スタッフ全員、学校事務職員全員が大きなスクラムを組み一体となって学校事務の課題解決にあたっていこうと、ついに動き出すことができたのです。

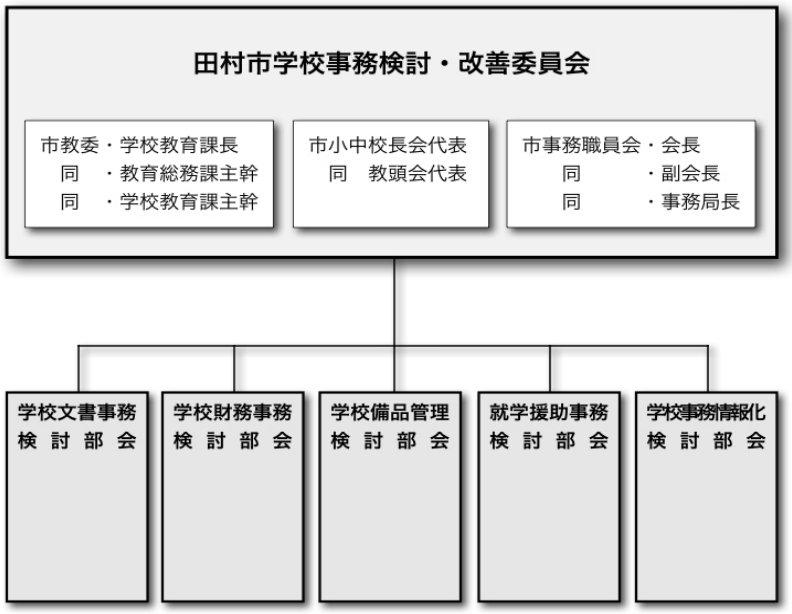
なお、当面の課題については次の５つを設定して検討部会を設置し、市教委の担当者とともに必要に応じて会合を開き、一定のスパンで課題解決にあたっていくことになりました。

○学校文書事務
○学校財務事務
○学校備品管理
○就学援助事務
○学校事務情報化

とりわけ学校備品管理事務については喫緊の課題であり、備品管理システムの早急な整備が求められました。

学校備品管理検討部会では、旧船引町のデータベースシステムをベースに新しいシステムを構築する一方、小中学校備品管理規程および備品整備要領等を制定していくこととなりました。10 回に渡る会合を重ね、平成 20 年 2 月に一定の完成に至り、備品管理システムとともに「田村市小・中学校備品管理規程」等が制定されました。正に夢がかたちになった瞬間でした。

さらに就学援助事務の手引（事務処理要領）についても整備され、学校事務情報化検討部会では、グループウエア利用マニュアルや財務端末利用マニュアルなどが整備されてきました。これらを弾みに現在は文書取扱規程や取扱要領および文書事務の手引等の整備や、学校財務事務の手引の整備などに向け、最後の詰めを行っている段階と聞いています。



スクラムの広がり

田村市事務職員会では、このほど県内他地区事務研から招かれ、田村市における学校備品管理規程等整備の経緯や備品管理システムの概要などを紹介する機会があったそうです。招かれた自分たち以上にしっかりとした取り組みがすすめられている‥‥。その様子などを目の当たりにしただけでも意識は大きく変わってくるものです。かつての仲間が頑張っている様子には、懐かしさだけでなく心強さを覚えたとも言います。双方にとって大きな意味のある研修になったことでしょう。

こうした地区間の交流が少しずつ進んできています。これを支援するのが福島県事務研がすすめている「講師派遣事業」という制度です。地区や個人の実践・成果を広く紹介するため、県内の学校事務職員を事務研究会等に招聘する際、旅費などを負担して地区間交流を奨励するというものです。いずれ広範な連携が強まることを期待するものです。県内 16 支部が連携しスクラムを組んで活動をすすめたら、これまで以上に大きな成果をもたらすことができるでしょう。

田村市とは別に、三春町では就学援助事務処理要領の整備に至りました。やはり町教委との連携を図り課題を共有し同じ目標に向かって同じテーブルで考えながら取り組んだ成果であると思います。

三春町では現在、文書管理、備品管理、財務事務の３つの課題に取り組んでいますが、もう一つの自治体・小野町でも同様の取り組みが始まるかもしれません。学校統廃合という大きな課題も抱えており、まずは町教委担当者を交えての協議を深める現在のスタイルを

継続しながら、より一層連携を深めていこうとしています。

田村市の学校事務検討・改善委員会は、結果的に地区事務研における方部（市町）ごとの活動をこれまで以上に推進することとなりました。前述したように、それぞれの課題や目標を明確にして、さまざまな連携のもと少しずつ夢をかたちにしています。

夢をスクラムで

スクラムによって、パワーも、スケールも、スピードも、クオリティも、格段にアップするでしょう。一人ではとても困難なことです。連携して力を合わせて取り組んでいくことにより、これまで以上の学校事務機能を提供することができるでしょうし、それは我々自身のやりがいにもつながっていくのではないでしょうか。

田村地区事務研が最も危惧していることは、今後ますます進むであろう学校統廃合による学校数の減少、つまり学校事務職員の大幅な減少です。一人職という感覚が一層強くなっていくことでしょう。それでも学校事務は個々に対応していて良くなるでしょうか。何らかの手立てが必要になってくるのではないか、何らかの手立てを考えなければならないのではないかと思うのです。

全国学校事務研究大会福島大会のシンポジウムで、国立教育政策研究所の加藤先生が「領域論ではなく機能論を、切り取るのではなく関わることを」というお話しをされましたが、そこがアウトソーシングとの大きな違いであるとも思います。学校事務の「職務」と「業務」とを混同しないことです。職務として区分する必要はありますが、業務は密接な職務の関わりによって成り立っているものですから、連携無しでは考えられないのです。

学校がある限り学校事務は存在します。それを誰がすすめるかはともかく、一人ですすめることはますます困難になります。事務運営計画はもちろん研修・研究のための計画も必要ですし、連携してすすめるための計画も整備しなければなりません。どの地区でも、どの地域でも、あるいは個人の間でも、学校内部でも、連携して取り組んでいる実態は多分にあります。その連携をいかに効果的にすすめていくか、さらに具体的に示していくものが「共同実施」なのではないかと思っています。

次回は、福島県ではすすんでいない「共同実施」について、田村地区事務研としてさまざまな観点から考えてきたその在り方などについてお話ししたいと思います。

［平成 20 年 12 月号］

第 10 回　夢か幻か、あんしんサポートプラン

こんなことできたらいいな

それはとてもシンプルな発想でした。１人で１校分の事務をするよりも２人で２校、３人で３校分の事務処理をした方がずっと効率的だしいろいろできるよなぁ‥‥。そんな話は 20 年も前にしていたことなのですが、そう簡単にはいかないのが現実ですね。

全国各地で「共同実施」の取り組みが始まり、それぞれの具体的な様子、成果や課題がこの「学校事務」誌などでも幾度となく紹介されてきました。例えば宮崎の例を考えれば、少なくても約 10 年間は遡ることになります。が、ここ福島県では「共同実施」の例がありません。

田村地区事務研でも全体で共同実施について議論をすることはほとんどなかったのですが、以前ご紹介した主題別研究の中で、１グループが共同実施の現状をまとめ「こんなことできたらいいな」という田村地区としての在り方を考えてみることになったのです。平成 14 年度のことでした。

資料を収集し田村の実態に照らしながら検討することによって、自分たちのスタイルが見えてくるのではないかと考え、２年間の小さな研究を終えました。残念ながら、共同実施のイメージづくり程度にとどまり具体的な実践につながるまでには至らなかったのですが、年度末の地区全体研究協議においてさまざまな意見交換をすることができたことが何よりの成果であったと感じています。平成 11 年度の会員調査で「賛成」がわずか３％だった共同実施が、15 年度末のこの段階では 50％にまで増えたことが特長でもありました。

この研究をベースに、平成 16 年度県事務研究大会で発表する機会をいただきました。それまでなかなか取り上げられることのなかった共同実施について、その是非だけでなく在り方の一例を踏まえた県全体での協議につながりました。

それが平成 18 年度の東北大会にまでつながるわけですが、概要は次のとおりです。

事務研ベース・田村の共同実施

（平成 18 年度東北大会研究集録より抜粋）

加配があろうとなかろうと、共同で事務を運営するということは、未配置校をカバーするということであり、同時に大規模（中規模）校の複数配置化をも実現することとなる。１人の事務職員が１校で１校分の事務にあたるのではなく、学校規模や施設環境、教職員配置などさまざまな条件の違いを体験しながら、複数の事務職員で複数の学校事務を共同的にすすめるのである。それぞれが抱えていた課題などに対しても、実践、研修、研究といった PDCA サイクルがより一体的・組織的に繰り返されるだろうと考えられる。

事務研はこれまでの活動において、相互に資質向上を目指し高め合いたくさんの成果を積み上げ、その目的を少なからず果たしてきたところだが、それを個々のものとして終わらせないで、地域全体の学校事務・学校改善を目指すべく、さらに共同的に対応していくような事務運営のスタイルに結びつけていくことを考えていかなければならないだろう。研究団体としての活動から、共同的な学校事務を展開する運営組織へシフトすることで、比較的容易にすすめられるのではないかと考える。情報公開や説明責任などが求められる中、チェック機能を高め、ネットワーク化を推進し、効率的な事務の在り方を探るとすれば、事務研組織の見直しとその組織を最大限に利用した「共同的な学校事務運営の展開」に行き着くのではないだろうか。

（中略）

学校間連携を強く意識しながら、校内の諸規程や事務運営計画など、いわゆる学校事務の「システム」を広域的に構築･整備していくことである。分担しながらそれぞれの個性を生かした計画を立

て、グループ内全校での運営をすすめる。その結果、学校規模に応じた相互支援なども含め、効果的、効率的な事務処理・事務運営が、学校間の格差なしに展開されるのである。共同実施のメリットを生かしながらそれぞれの計画をさらに教員部分に結びつけるような取り組みや、拠点校的な役割を担う部分が見えてくると、いよいよ加配の必要性が感じられるようになるのではないかと思う。

共同実施は特別なことではなく、組織的な運営を意識して小さなことから少しずつ始め、その中で課題を解決しながらすすめていくようなことでいいのではないだろうか。田村の共同実施のイメージを次のようにまとめる。

（1）事務研究会をベースにした相互担当制による共同的事務運営の推進
（2）集中処理を可能にするための兼務発令
（3）ネットワークとデータベース利用による学校事務情報化の推進
（4）校長会等各種組織、教育委員会等との一層の連携
（5）学校ごとの特色ある教育活動を支援する学校事務の確立

（抜粋おわり）

たむら学校事務あんしんサポートプラン

東北大会発表の後も地区内での議論は少しずつ継続され、必ずしも当時のイメージどおりではないという現実があります。例えば「相互担当制」などは一例的な方法であるし、「特色ある‥‥」には具体性がありません。

しかし、それらは実践の段階でこそ細かく議論すべき･できることですから、まずは地域のグループごとに何をすべきかを考えて具体的に取り組んでいくことが大切ではないかと考えています。どの学校でも標準的な学校事務機能が安定して提供されるようにするためには、やはり一定の地域内で連携しながら事務を運営していく必要があるのではないでしょうか。我々が考えることではないのかもしれませんが、我々が考えるからこそ現実的なものを構築できるのではないかとも思います。

そのために、

○未配置、経験不足、大規模等の特性支援
○学校現場での実務研修強化
○事務運営の標準化と学校運営への参画

などを目標に、共同実施を事務の学校間連携と捉え、2年ほど前に「たむら学校事務あんしんサポートプラン」の案を示しました。課題、知恵、成果を、市町あるいは方部の小グループ単位で共有しながら相互支援をすすめるという計画です。それは全く新しく始めることではなくて、これまでの事務研活動そのままかもしれません。ものすごく泥臭いことを考えているのかもしれません。

共同実施は常に1カ所に集まることではないと思っています。それぞれの学校に居る（要る）ことが原則です。しかし学校・学校事務間の垣根を低くして行き来しやすくすることで、オープンになり透明性が高まります。標準化がすすみ自ずとクオリティも向上するでしょう。それこそが学校事務確立の原点ではないかと考えます。

せっかくのイメージ（夢）を一時の発表（幻）だけで終わらせないために、事務運営の視点と意識を変えながら、今後も継続的に取り組んでいきたいと考えています。

夢に向かって「やってみよう」

たむら学校事務あんしんサポートプランは、「こんなことできたらいいな」から「やってみよう」へと一歩すすめるための計画でもあります。事務職員としての資質向上や学校事務のさまざまな標準化などを目指していくこと、つまり研修や研究の推進とも捉えられます。そのためには、

○地区全体の活動から、市や町・班単位など方部での取り組みへシフトする
○より一層の連携と実務に即した取り組みを展開する
○標準化の推進と学校事務の確立を目指した取

り組みに結びつける

ことがポイントであり、まずは組織や活動の見直しへとつながっていった次第です。

つい先日開催された方部別研修では、各校・会員の実践例に学ぶことを統一テーマに研修がすすめられましたが、「身近な実践をより自分に近いところで勉強できる良い機会だった」などの声が多く聞かれました。学校を会場にして、実際の様子を見ながら具体的に取り組みの成果や課題を考え、次の目標・夢が明確になったという方部もあったようです。次はまた別の学校を会場にするとか‥‥。いずれも、その後の方部独自テーマによる研修での活発な意見交換に結びつくなど、小グループで運営する活動のメリットをうまく生かしていると思います。

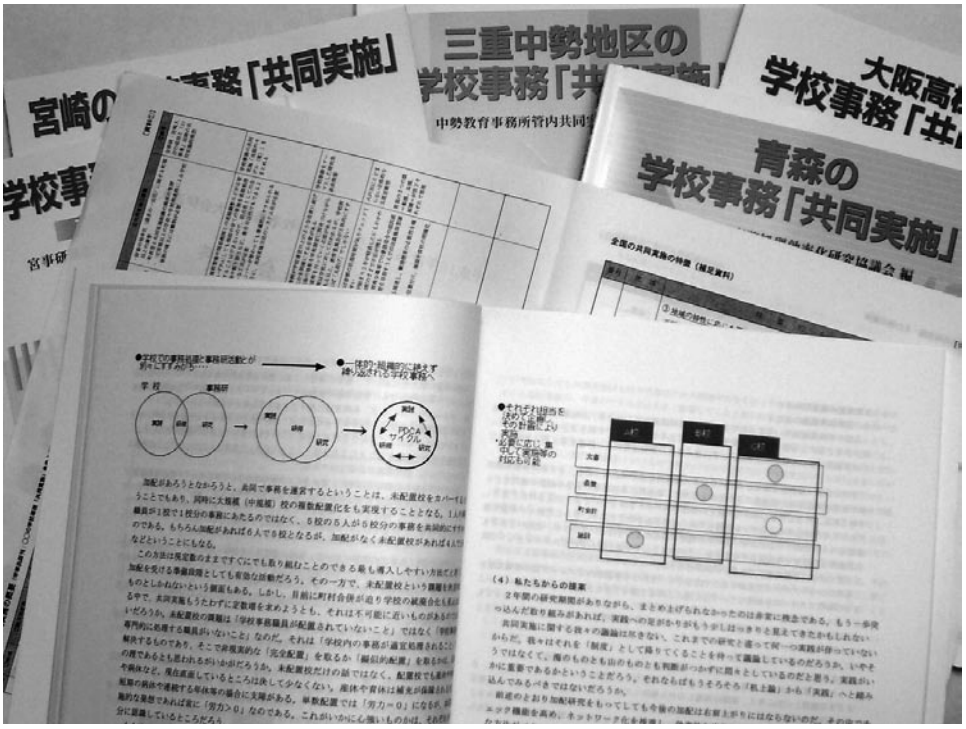
また、地教委事務担当者を交えて協議をすすめた方部では、時間が足りなくなるほど細かい話し合いができたそうですが、それだけ連携を強化していく必要があるということだろうとも考えられます。

少しずつではありますが、方部や小グループへとシフトした活動の効果が現れてきました。もちろんそれらを方部だけのもので終わらせないようにするため、会員メーリングリストや「ちょっとニュース」などで取り上げ、全体で共有することも怠らないようにしています。各方部のアイディアがさまざまな連携の在り方も見つけてくれるのではないかと期待しています。

現場で「共」に見て感じて、成果や課題を「同」じように考え、目標「実」現のための取り組みを、一斉に「施」すこと。そんなシンプルな発想は当初の思いと何も変わりません。たむら学校事務あんしんサポートプランの夢がかたちになるか幻で終わるか、大切なのは、活動をしっかりまとめ体系化を図りながら計画的にすすめることなのでしょう。

これまでの連載で述べてきたことが、実はここに集約されるのではないかと思っています。事務研組織や活動の見直し、さらなる研修・研究の推進、各種運営プログラムの整備、ネットワークの利用、新しい観点での広報活動、学校間・組織間の連携強化などを考えると、事務研は学校事務「研究」にとどまらない学校事務「運営」をすすめる組織であるべきではないかと思うのです。

［平成 21 年 1 月号］



第 11 回　グランドデザインが夢をかたちにする

活動をわかりやすくまとめる

１年間の長い連載もいよいよ大詰めを迎えます。毎回のテーマにつながりを持たせて書き進めてきたつもりでしたが、振り返ってみるとどうも断片的で文章力の弱さを露呈してしまったなぁと痛感しています。

さて、前回の最後に「事務研は学校事務『研究』にとどまらない学校事務『運営』をすすめる組織であるべき」と書きました。それでは「運営」とはいったい何でしょうか。一般的な意味はさておき「学校事務運営」として考えると、「子どもの豊かな学び・育ちを支援するため学校という組織の中で事務機能を最大限効果的に提供していくこと」ではないでしょうか。

どうしても事務研だけで考えがちだったことを、学校のシステムとして定着させていくため、我々はもちろん関係機関も含めた全教職員の連携によって定着させていくということを強く意識しなければならないと思うのです。

そのためには、我々が何のためにどのような活動を展開しているのかを具体的に伝えていかなければなりません。活動をわかりやすくまとめること、つまりグランドデザインが必要なのだということにようやく気がつきました。まだ作成中ではありますが、何を目標にどんなテーマで活動をするのか、そのための手だては何なのか、具体的な活動は何か、外部との関わりはどうなのか、そうしたあれこれを考えてみて、ようやく何かがわかってきたような気もしています。目標と手段とを混同していたこともわかってきました。

グランドデザイン１・活動

どんな取り組みでも、何を、誰と、どのようにすすめるかを明確にしてあたっていくことが大切です。田村地区事務研では組織や活動の見直しをすすめ、活動を次のように３つに分けました。

1　**まとめる活動…積み上げと資質向上**
　＝研修委員会 →　カリキュラム研修、コンピュータ研修等

2　**すすめる活動…高い意欲と一層の効率化**
　＝研究委員会 →　主題別・方部別研究、各種研究会への参加等

3　**つたえる活動…連携と学校事務への理解**
　＝広報委員会 →　会報等の発行、ホームページやブログ運営等

「何を」にあたるこうした活動を、学校事務職員だけのものと捉えるのではなく、現場での具体的な実践として学校ぐるみで展開していくことも考えていかなければならないでしょう。田村地区事務研はひょっとするとこのあたりが弱いかもしれません。

連携を図り学校事務への理解を深めていくためにも、内部ばかりでなく外部へ向けた広報活動が一層重要になってくるだろうと思っています。

グランドデザイン２・連携

次に「誰と」についてですが、これも見直しによって次のように活動の３つの柱が浮かんできました。

1　**学校事務職員の相互支援を目指す**
　＝会員自ら意識を高め、組織的に活動を推進する

2　**教職員全体での事務運営を目指す**
　＝目標や課題、活動ビジョンを具体化する

3　**学校事務の確立を目指す**
　＝学びや育ちを支援する学校事務の在り方を示す

これらは全て連携であり、「誰と」ということにつながってきます。

1　**会員相互の連携**
　＝地区会員、県事務研会員等

2　教職員・関係機関との連携

＝校長会、教頭会、教育委員会等

3　地域や社会との連携

＝保護者、地域、社会

繰り返しになりますが、課題や取り組みを事務研や事務職員だけの話にするのではなく、学校や社会全体で広く考えていくようにすすめるべきではないでしょうか。逆に言えば、我々は学校事務以外の部分に関わっていくことが求められるわけですが、それぞれの立場で相互に乗り入れながら学校運営全体についていっしょに考え・取り組むのは当然でしょう。我々はとりわけ学校事務の分野における連携のリーダーとなって推進する、それが事務職員に求められる役割なのではないかと思うのです。

グランドデザイン３・手立て

そしてこれらを「どのように」すすめるかです。「何を」「誰と」については、どの事務研でも大きく異なることはないでしょう。しかし「どのように」は事務研ごとに違っています。それぞれのすすめ方があっていいと思うのです。田村地区事務研では「研修・研究ガイドライン」をベースに次のようなさまざまなプログラムを利用して具現化することにしました。

1　学校事務情報化すすめ方プラン

＝広域イントラネットの活用とメーリングリスト運営

2　たむら学校事務あんしんサポートプラン

＝方部や班単位での共同的な取り組みとＯＪＴの推進

3　広報あぶくまＶＩＰプラン（案）

＝ホームページやブログの運営と会報・資料等の発行

活動を体系的にまとめることによって、課題や目標がはっきりとしてきます。それらを細かく示すことを「プログラム」と呼んでいますが、会員はすすめ方や課題がわかりやすくなり、共通理解を図ることも容易になります。

私たちは、これらのバグを取り除き、バージョンアップを重ねながら、よりしっかりしたプログラムにしていきたいと考えています。もちろん課題もたくさんあります。しかしそれによって目標は立てやすくなるものです。負と捉えないで、前向きに課題を見つけること・課題に気づくことが大切なのです。

これらのプログラムの今後については次のように考えています。

1　学校事務情報化すすめ方プラン

活動の部分的なものではなく、全般に渡って意識していくことが重要です。細かく見直しながら引き続き取り組んでいく必要があります。

2　たむら学校事務あんしんサポートプラン

市町村合併以降、学校の統廃合が急速に進んでいます。広域的な事務運営、共同実施の是非も含め、改めて具体的な検討をする必要があります。

3　広報あぶくまＶＩＰプラン

広報活動について中・長期的にまとめた計画がなかったことから、新たに作成すべきではないかと考えています。前述のように内側での連携はもちろん外側に向けた広報活動を展開して、我々の応援団を作っていく必要があります。学校事務が理解されなければなりません。

そのためには、まず自分たちの取り組みをどのように評価し、それがどのように評価されているかを常に把握する必要があります(Value)。そのためには活動状況や情報をきちんと伝えなければなりません（Inform)。また将来を見通して、学校教育における学校事務としてのビジョンについて、何をどのようにすすめていくのかを示す必要があります（Plan)。このような観点での広報活動を、このプランの中でもう少し細かく計画していく必要があります。

グランドデザイン４・目標とテーマ

こうした３つの観点を踏まえ、安定した学校事務機能の提供を果たしていく、これが学校経営への参画であると考えています。それは、子どもの豊かな学び・育ちを支援する学校事務の確立を目指すということであり、私たちの活動テーマ「学校事務の夢をかたちに」に結びつくのです。

それを一人ですすめるのは容易でありません。現実を把握して、同じ目線で話し合い情報交換することが必須条件なのです。活動、連携、手立て、目標とテーマ、これらを明確にしておくことで活動はすすめやすくなりますし、自分自身が評価しやすくなり活動の継続性にもつながっていくことでしょう。

それがグランドデザインであり、「夢をかたちに」するための大きな指標となるのではないでしょうか。

一例として、これらを整理した「田村地区事務研グランドデザイン」を示すことができれば良かったのですが、私たちもまだ検討中ということですのでご容赦ください。ただ、あまり形などにとらわれず、自分たちの目指すものやその手立てなどをそのまま示すことが、まず第一歩ではないかと考えているところです。

まとめに代えて

さて、４Ｗ１Ｈという観点では「いつ」「どこで」が足りません。我々は「常に」「学校（その場）で」子どもたちと関わりながらできることが理想だと考えています。残念ながら「常に」の部分が一人職の弱みでしょう。しかし、ネットワークという強みを利用することによって「常に」つながりをもってすすめられる、そんな事務研を目指したいと思っています。

そのための「つなげる運営」が重要な役割を担っています。第６回でご紹介したメーリングリスト運営などをはじめ、いわゆる庶務・会計にあたる事務局の細かい業務にはただただ感謝するばかりです。副会長も含めた各委員会の運営もそうですし、会長の内外さまざまな労苦も察します。

一方の会員は‥‥研修会の講師などを順次依頼されますからそれもたいへんです。それぞれがそれぞれの課題と向き合ってすすめている主題別研究などもありますし。しかし結局のところいずれも自分自身の研修につながっていくわけで、お互い様という「結い」や「Give & Take」の精神が活動を支えているのかもしれません。

そんな活動のベースにしている「研修・研究ガイドライン」の改訂作業もいよいよ最終段階を迎え、間もなく会員に配布されるようです。この連載を機に会員も改めて自分たちの活動を振り返ったうえで受け取ることになりますから、活用に一層弾みがつくのではないかと期待しています。

また、グランドデザインについてはできるだけ早めに会員に示して意見を集約し、さまざまな「夢をかたちに」することができるよう、到達目標をもう少し具体的なものにしていきたいと考えています。ただし急がないこと。のんびりではなくじっくりと。時間をかけることで何が必要で何が不要なのかが見えてきます。会員もそれを理解してきます。

いよいよ次回は最終回となります。今回ある程度のまとめとしたつもりですが、最後は活動と連載とをみんなで振り返りながら幕を閉じることにしたいと考えています。

［平成 21 年２月号］

最終回　夢をあきらめないで

新たな夢のスタートへ

宗像研究委員長：2008 年 12 月、活動のベースである「研修・研究ガイドライン」を８年ぶりに改訂し会員へ配布しました（別冊資料）。学校教育目標の具現化・達成のため、私たち学校事務職員は何を研修･研究すればいいのかという観点で、旧ガイドラインによる活動の課題、現在抱えている課題、今後予想される課題、そしてさまざまな成果等も踏まえながら、一丸となって新ガイドラインの策定をすすめてきた次第です。

田村地区事務研の活動テーマ「学校事務の夢をかたちに–そこから改善・定着化–」実現を基本目標、「教育支援スタッフとしての学校経営への参画」を重点目標としました。今年度を含めた５年間を基本スパンとして活動を推進していきたいと考えていますが、私たち学校事務職員の夢をかたちにしていくうえで、新しいガイドラインがその一助になればと期待しています。

橋本（清）副会長：ガイドラインが整備される前はどんな内容を企画すればよいのか、整備後それを運用していく上では時間的・人的な課題が立ちはだかるなど、研修会の運営はそれぞれ違った苦労があったことが思い出されます。無理はせず可能な範囲でひとつずつ消化するようにすすめてきました。何をやり残しているかがわかりますから、それは次に引き継ぐかたちですすめてきたわけです。

今後は新しいガイドラインに合わせた運営方法などを再検討することはもちろんですが、事務研究会の存廃にも影響するような昨今の情勢を踏まえ、激減するであろう研修の機会をどのように確保するかなどについても、全会員で考えてく必要があると思っています。

夢をつたえよう

林副会長：田村市の誕生とともに「田村市学校事務検討・改善委員会」が発足し、５つの課題に向けた取り組みが始まりました。それまで思い描いていた夢をかたちにするチャンスだと思いましたが、教育委員会と共に計画に沿って協議をすすめ取り組んでいかなければならない現実は容易なことではありませんでした。が、やがてそれぞれの課題に応じた事務処理要領等が整い、学校事務が円滑にすすめられるようになったのです。

その実践例を紹介する機会をいただき、それまでの苦労や大きな喜び・成果などについて自信を持って伝えることができたと思っています。一人では到底なし得ないことでもみんなの力を結集して「スクラム」を組んで実現していくことのすばらしさを実感し、正に「夢をかたちに」した瞬間だと思いました。私たちの思いをもっと外側に向けて伝えることで、夢はさらに大きく広がっていくはずです。

渡邊（和）広報委員：自分たちの活動について改めて文章にまとめるという作業によって、課題も成果も見えてくることは少なくありません。それを会報やちょっとニュースの記事にするということはとても意味のあることだと思っています。が、特に忙しい時期の原稿依頼などは、正直申し訳なく思いますし、断られることだってありますからどうしても凹んでしまうんです。

ただ、特にちょっとニュースなどは、外部に向きながらも自分たちのまとめになっていると考えると、「広報委員会が運営する」のではなくて「会員がつくっていく・発信する側になる」という意識が一層大切になってくると思います。新しい取り組みも少しずつ定着化しつつあるように感じますが、会報特集号なども含めずっと続けてきた広報活動が、その下地を作ってきたように思います。

小野塚広報委員長：広報委員会設立から現在までの活動が、やさしい山並みを表したロゴ「あぶくま」と共によみがえってきたような思いです。今年度からメールマガジンによる会報配信へと情報提供のスタイルは変わりましたが、その役割はもちろん、知識やノウハウ、そして「夢」を全会員で共有していこうという強い思いは変わりません。

広報活動のテーマ「つたえよう今を、届けよう夢を」のとおり、今後はさらに地域や職種の枠を越えて「学校事務」の思いを伝えていくために、組織的なビジョンを織り込みながら外部へ広く発信していくことを意識した活動をすすめなければなりませんね。

夢に向かって

遠藤（利）事務局員：主題別研究ではいろいろなことをしてきたなぁと思います。採用間もない頃は、事務所等主催の説明会資料を分類して綴り直したり、事務だよりを作ったり、小さい取り組みでしたが充実感はあったんですね。参加する研修もいいですが、実践する研究も楽しいものです。

ただその定着が難しく、結局今も同じ事を繰り返し研究しているのではないかと感じない訳ではありませんし、着実に実践している学校を羨ましくさえ思います。

でも、背伸びせず小さな取り組みを積み重ねながら、グループ内で確認し合い、前よりも良くない？と感じられたらそれもいいかなと思うんです。年度末のまとめでそれぞれの状況を知り、それが刺激にも励みにもなっています。

菅野（裕）研修委員：卒業してすぐ何の研修もなしに最も忙しい４月にいきなり大量の事務処理に向き合う‥‥新採用時の苦労は言葉にできないほどたいへんなものでした。せめて新採用者については共同実施のような配置があれば、OJT によって経験豊富な方から正しく教えていただけるでしょうね。

安藤事務局員：スキルアッププログラムは、実務に沿っていてとても助かりました。資料もわかりやすく目標を明確にできたと思います。レベルの高さを感じるところもあるのですが、常に利用できるメーリングリストのおかげでフォローアップも可能になりました。

ネットワークの利用により、それまでは聞きにくかった事務処理上のノウハウなども共有しやすく、今やなくてはならないものです。情報化すすめ方プランによって確実に ICT 化がすすんだことを実感します。

本田前研究委員：カリキュラム研修では、担当していない事務内容などでも分かりやすく解説してくれたり、コマの割振調整で頭を痛めたり、企画する研修委員会の苦労はたいへんだと思いますが、研修会終了後のアンケートによって会員の声を反映させながら、それらを PDCA サイクルで次の研修に活かしていくという運営方法が、うまく機能していると思います。

佐藤（ヒ）県事務研企画推進委員：カリキュラム研修を終えるとかなりの疲労感も覚えたものです。しかし今になって考えると、守備範囲外とも思える広範なものだからこそ、学校全般について理解が深まって現在の実践などにつながっているような気がします。講師を任されることによって自分自身の勉強にもなりました。

とにかく「こつこつこつこつ夢の足音」という言葉が、正に田村地区事務研のこれまでの取り組みを表していると思います。そうした取り組みをさらに体系的・計画的にすすめるうえでも、グランドデザインは必要ですね。それを実現していくためのアクションプランも必要ですし、年度ごと何らかの数値目標を定めることで評価もしやすくなり、より実効性が高まるのではないでしょうか。

夢をあきらめないで

石井事務局長：自分たちの歴史を振り返ってみる

と、学校事務というものが大きく進化・変化してきたという実感はあります。求められているものはとても大きくなっているとも感じます。しかし、事務研に集い学び共通理解のもと実践していくという基本は変わりません。

手前味噌ですがそれぞれの事務研が今回の連載をぜひ参考にしてほしいと思っています。意識は皆さん高まっているでしょう。そこから具体的に実践するにはどのような方法があるのだろうか、その手立てをじっくり研究していく必要があるのではないかと思っています。

坪井会長：良き先輩事務職員に恵まれ、校長会・教頭会、教育委員会等の支援をいただきながら「学校事務の夢をかたちに–そこから改善・定着化–」に基づいて活動を推進してきましたが、あの頃20代の会員も今や40代後半のベテランとなり、事務研では若い会員の指導的立場となりました。職場（学校）では、学校運営の中核的な立場を担うようになってきました。徐々にではありますが事務研活動で培われたものが「かたち」となってきていますし、若い会員がそれを引き継いでおります。心強いものを感じます。

しかし、学校事務の「夢」を夢のままで終わらせない、そんな気構えは今後も必要ですし、まだまだ課題は山積みされたままなのです。だからこそもっともっと学校事務の「夢」について語り合いましょう。思い描きましょう。後ろを振り返る必要はないのです。子どもたちの豊かな学び・育ちを支援しながら、働きがい、やりがいのある、そんな学校事務を目指しましょう。夢をあきらめてはいけないのです。

おわりに

「学校事務」に私たちの取り組みが掲載されるなんて、とても考えられないことでした。が、連載の計画を立て回を重ねてくると、自分たちの取り組みをまとめるって大切なことなんだと改めて気づかされたのです。皆さんへの紹介というよりは、田村地区事務研のここまでをまとめる形になり、これを機会に・ベースに次のステージへすすんでいくことができそうな気にもなりました。

そのチャンスやフィールドを提供してくださったたくさんの関係者の皆さんに、そしてそのきっかけを作ってくださった福島大学特任教授宮前先生に、深い感謝の意を表し連載を終えることにします。

また新しい年度が始まります。桜の季節もやってきます。樹齢千年を誇る三春滝桜にはとても及びませんが、いつか大きなかたちにする夢を語り、描き、またひとつひとつ積み重ねていこうと思います。１年間ありがとうございました。

［平成21年３月号］

平成 20 年度　田村地区公立小中学校事務研究会員名簿

■ 小学校

方部等		No	学校名	氏　名
田村市	滝根	1	滝　根　小	松　本　義　一
		2	菅　谷　小	菅　野　雅　子
		3	広　瀬　小	先　﨑　カツ子
	大越	4	上大越小	安　瀬　幸　子 先　﨑　里　美
		5	下大越小	遠　藤　あけみ
		6	牧　野　小	仲　澤　千　恵
	都路	7	古　道　小	石　田　孝　明
		8	岩井沢小	松　本　晴　美
	常葉	9	関　本　小	紺　野　由里子
		10	山　根　小	－
		11	常　葉　小	本　柳　　香
		12	西　向　小	小野塚　良　子
	船引	13	芦　沢　小	渡　邊　和　枝
		14	船引南小	伊　藤　哲　也
		15	船　引　小	本　田　照　美
		16	美　山　小	松　本　栄　子
		17	緑　　小	柳　沼　祐　子
		18	瀬　川　小	佐　藤　富美子
		19	石　森　小	安　藤　智　子
		20	春　山　小	田多羅　健　志
		21	要　田　小	大　内　や　す

方部等	No	学校名	氏　名
三春町	22	三　春　小	佐　藤　　恒
	23	岩　江　小	山　田　由紀子
	24	御木沢小	渡　邉　喜栄子 山　城　まゆみ
	25	中　妻　小	大　原　由　美
	26	中　郷　小	伊　藤　文　子
	27	沢　石　小	高　橋　順　子
小野町	28	飯　豊　小	小　川　文　江
	29	浮　金　小	川　村　　幸
	30	小戸神小	－
	31	小野新町小	宗　像　智　子
	32	夏井一小	郡　司　裕　子
	33	夏井二小	今　泉　麻　美

■ 中学校

方部等		No	学校名	氏　名
田村市	滝根	1	滝　根　中	佐　藤　ヒロ子
	大越	2	大　越　中	坪　井　孝　幸
	都路	3	都　路　中	仲　澤　市　雄
	常葉	4	常　葉　中	松　坂　孝　志
	船引	5	船引南中	渡　邊　浩　幸
		6	船　引　中	石　井　隆　義
		7	移　　中	宗　像　栄　治
		8	瀬　川　中	林　　みどり

方部等	No	学校名	氏　名
三春町	9	三　春　中	高　橋　千栄子
	10	岩　江　中	穴　澤　賢　一
	11	桜　　中	橋　本　広　治
	12	沢　石　中	遠　藤　利　子
	13	要　田　中	鹿　又　健　児
小野町	14	浮　金　中	菅　野　裕　圭
	15	小　野　中	橋　本　清　一

執筆を終えて
（おわりに）

最終回は、全体を振り返りながら会員の思いを伝えたいと考え、それまでの感想も含めてさまざまな意見などを集約することにしました。

が、限られた字数のためほんの一部しか掲載することができず、少々悔やまれるラストになってしまっておりました。せっかくの声を何とか伝えたいという思いから、まとめの最後に付け加えさせていただきました。ぜひそこまでお読みいただければと思います。

さて、第11回に書きましたように、今後は活動のデザイン、連携のデザイン、手立てのデザイン、目標とテーマのデザインを再度検討しながら、地区事務研としてのグランドデザインを作成し、計画的かつ柔軟に取り組んでいくことができればと考えています。これまでと同じように‥‥です。

私たちにとって重要なのは、こうした取り組みの成果が学校現場で確実に活かされ定着して、子どもたちの豊かな学びをしっかりと支援できることであり、同時に学校事務という職が確立することです。

しかし、我々学校事務職員だけで学校事務の全てを処理しさまざまな課題を解決できるわけではありません。こうした厳しい時代だからこそ、それぞれの職や立場に応じた連携が必須であると痛感しています。学校事務に限ったことではなく、それぞれがどのように連携し、どのように対応していくか、これは共通の課題ではないかと考えています。

学校事務研究会としての取り組みを着実にすすめてきたつもりですが、その具体的な内容や成果が、学校事務職員以外の方々の目や耳に伝わらなければ、連携のきっかけにもなりません。理解されなければならない、伝えなければならない、連載を通して最も強く感じたことでした。

「学校事務」を通して全国の学校事務職員に伝えてきたわけですが、もっと大切なのはこの田村の全ての教職員、関係機関の皆さんに読まれることだと思い、 大きな期待を寄せながらその機会を研究物展とした次第です。 ぜひ率直なご意見・ご感想をお寄せくださるようお願い申し上げ、執筆の全てを終えたいと思います。

学校事務連載　－学校事務の夢をかたちに－

ご感想・ご意見をお寄せください

平成20年12月2日

会員の皆様へ

この春４月号からスタートした学校事務誌の連載「学校事務の夢をかたちに」の原稿作成は残すところあと１回。いよいよ来春３月号掲載となる最後の原稿作成ということになってまいりましたが、年内の提出を目指しております。

毎月いっぱいいっぱいの中で作成し、惰性的な話ばかりになってしまったような気がしていますが、これまでの田村の成果、取り組み方・考え方などを、そのまま出したつもりではあります。ただ、部外しかも全国版という場である以上、オブラートに包まなければならないことも少なくなく、知っている側からすれば歯がゆい感覚もあったのではないかと思うところもあります。誌面や字数の制限もありますから、気がつくと概要だけで終わってしまうこともたびたび‥‥。

中には総意ではなく個人的な考えなども散見したかもしれませんし、いずれにしてもただただお詫び申し上げるしかないのでありますが、もちろん他意はありませんから、そこはご理解いただきたいと思いますし、自分なりに田村のたくさんの取り組みをつなぎながらまとめたつもりです。それぞれが再考する機会になればという思いもありますので、ぜひこの機会に再読いただければと思います。

さて、最後の原稿を執筆するにあたって、やはりこれは全体を振り返ることにしてみたいと思います。これまでの原稿に限らず活動そのものも含めてです。そこに会員の皆さんの思いなども織り込むことができればすばらしいですね。

そこで、以下に各号のテーマと小タイトル等を示させていただきましたので、可能な限り感想や意見などを書き加えてくださいますようよろしくお願いします。数行ずつしか取っていませんが、どんどん改行しながら書いてください。もちろん全部を埋める必要はありません。お気づきの所だけでもけっこうです。

実は役員の皆様には別途同様のお願いをしておりまして、原稿は限られた字数ですからヘタをすると収拾がつかなくなる恐れもあるんですが、いずれにしても何らかのまとめにして今後の活動に生かしていくつもりでおりますので、どうか忌憚のない声をお聴かせください。

年末に向かって忙しい時期とは思いますが、期限等は次のとおりとさせていただきます。紙媒体でもかまいませんが、電子データなら再入力の手間が省けます。お世話になります。

田村郡三春町立桜中学校　橋 本 広 治

要領	
	提出期限： 平成20年12月12日（金）
	提出先： (1) メールの場合‥‥‥→［hashimoto.hiroji@px45.fks.ed.jp］
	(2) ファクスの場合‥‥→［0247-62-3093］
	(3) 郵送等の場合‥‥‥→［〒963-7725 三春町大字鷹巣字瀬山213　桜中学校 橋本広治］

第１回・４月号	学校事務の夢を描こう！
こんにちは田村地区事務研です、学校事務の夢をかたちに、田村地区事務研の委員会活動、運営・組織を見直す時期、夢を実現させるために	

◎ こうなったらいいなぁ、という思いを常に思い描いてこの仕事に取り組んで来たように思います。夢で終わらせないために、一歩でも踏み出すことが大切だと改めて実感しました。また、変えるときは見直すチャンス。事務研活動を見直し、よりよくするために、全員がそれぞれに意識して常に一緒に進んでいくことが大切だと思いました。

◎ 改めて原稿を読んで組織改編の時のあのルービックキューブ？の絵を思い出しました(^^)。
田村地区事務研ってルービックキューブですね。軸がしっかりしていて小回りがきいてとにかくやってみようと色々な活動を展開しても最後にはきちんと揃う。そんなイメージです。
もっともっと「夢をたくさん見て、その夢をみんなで語り合い、夢を思い描いていく。そんな事務研」になるといいなと思いました。

◎ 田村地区事務研の会員は、何事にも前向きに物事を考え、夢を語ってきたように思います。同年代の事務職員が揃い「何とかなるさ。」ではなく、「何とかしよう。」という意気込みで研修・研究活動を進めてきました。
「習慣金曜日」と称して勤務終了後、喫茶店（？）に集まりコーヒーを飲みながら「学校事務の夢」について語ったこと懐かしく思われます。必要なことはやってみようと、形に囚われずに活動を展開してきました。

◎ 学校事務の夢は個々の思いであるということ、正にそのとおりですね。会員それぞれ歩幅は違っても、常に前に進んで行こうという意識は重要です。

第２回・５月号	研修・研究ガイドラインに夢を託して
まとめる・すすめる・つたえる、研修・研究ガイドラインの策定、ガイドラインへの思い、ガイドラインがもたらすもの	

◎ 途絶えることなく全員で手をつなぐこと…必要なことなのだと実感しました。ボトムアップを意識して研修を企画してくださる会員の皆さんに、改めて感謝しなければならないと感じました。ガイドラインが本格スタートした頃、産休に入ってしまったこともあり、経緯等について知る機会になりました。

◎ 研修委員をさせていただいた時に、ガイドラインがなかったら「安全衛生」の研修は企画していただろうか？「学籍」は？「免許状」は？「教科書」は？と考えます。ガイドラインによって広範囲で深い研修ができ、かつ、次の課題が見えてきていたのかなと思います。
ルービックキューブの次は、シャボン玉のイメージです。シャボン液の上にたくさんのシャボン玉があってお互いにくっつきながらだんだん大きくなっていってやがて一つになる感じです。

◎ ガイドラインができる前の研修会の運営やガイドラインを運用しての研修会運営の苦労などが思い出されます。
今後は新たなガイドラインが策定されたことによる研修会の運営や、少なくなるであろう研修の機会の確保をどのようにするのかを、会員みんなで考えていかなければならないと思います。
特に研修の機会の確保については、県教委が自主的研究団体を認めないという方向にいっているので、事務研究会の存廃にもかかわってくる大きな問題です。

◎ ガイドライン作成時には研究委にいたはずが、まったく作成に関わっていたという実感はなく、申し訳ない気持ちです。研修委にいた頃は、研修を企画する「産みの苦しみ」（？）を味わい、貴重な経験をさせていただきました。

第３回・６月号	夢に向かって、この指とまれ！
個々の課題に基づく取り組みを、縦割りの必要性、現在の状況と計画、主題別研究の成果と課題、県事務研とのつながり	

◎ 主題別研究会は、自分にとっての課題を思い描き、それに向かって小さくても一歩一歩実践を重ねていく大切な機会だと思っています。ただ、こうしたいという願いをまとめることだけになってしまい、なかなか実践に結びつかないところが反省点です。少しでも前進できるようにしていきたいです。

◎ 主題別研究では、色々なことをしてきたなと思います。採用間もない頃は、事務だよりを作ったり、事務所や福利課主催の事務説明会に配付された資料を分類して綴り直したりもしました。小さい取り組みだったかもしれません

が、充実感はありましたね。参加する研修もいいですが、実践する研究もまた楽しいです。　でも、今年の研究はあんまり進んでないなと反省しています。
研究しても、定着は難しく同じ事を繰り返して研究している感じもない訳ではありませんし、着実に実践をしている学校を羨ましくも思ったりもします。でも、背伸びしないで小さな取り組みを積み重ねて、前よりも良くない？と、感じられたらいいなと思います。

◎ 研究協議でいろいろ話し合って、たくさんのご意見や実践に触れることが出来るのに、それを学校に取り入れてみたい、取り入れてみよう、と思っても、なかなか進めていけない（自分に）ジレンマを感じます‥‥。
とは言っても、研究をすすめていくためには、やはり（大きくても小さくても）実践が必要であるので、小さくとも良い、その実践がなされていないと、なかなか協議がすすまない部分があるのでは‥‥ということも感じたりしています（すみません‥‥）。なので、小さくとも、何か行動すること！が大切なのだと、あらためて感じているところです。

◎ 主題別研究で取り組んできたことが、現在の田村市のあらゆる取扱要領などに波及しているということはすばらしいことだと思います。これが「夢がかたちに」なっていたということですね。

◎ 各班とも、最終年度には研究協議を行えるような心構えを持って研究をしていかなければならないのですよね。前回はそういう心づもりなない所に協議の発表を引き受けてしまったので、積極的に「発表します！」と言えるようにならないといけませんよね。

第４回・７月号	こつこつこつこつ、夢の足音
学校事務研修を補完しよう、カリキュラム研修の実際。ほんとにこれでいいのか！、たかがアンケート・されど、カリキュラム研修を振り返る	

◎ カリキュラム研修の企画を担当される会員の皆さん、講師を引き受けてくださる会員の皆さんにいつも感謝しています。
カリキュラム研修の研修内容はいくつもあり、興味関心が少ないものや説明が難しいものなどの講師は特に大変だと思います。コマ数の調整なども大変だと思います。また、会員の意見を知るためのアンケートについても、今後の研修にいかしていけるように考えていただいているのだと思い、ありがたいと思っています。

◎ やらなきゃいけない感で企画した研修では、会員の反応が良いわけありませんよね。当時は「講師としての技法」って「渉外連絡」っていったい何をやればいいの？？？でした。いっぱいいっぱいだったんですよ(^^；
県大会田村大会での実施してきたカリキュラム一覧を展示した時に「こんな事もやってきたんだな」と達成感のような物を感じたのを思い出しました。

◎ 他地区から異動してきた自分にとって、自前講師（みなさんが普通に講師をされていること）に大変衝撃を受けました。皆さんお忙しい仕事をかかえながら、研修の資料を準備し、講師も務める…。密度の濃さ、というか、本当に熱心な皆さんの姿を拝見し、「私は田村でやっていけるのだろうか‥‥（泣）」と思ったものでした‥‥。
講師を務めてくださる皆さんに、いつも本当に頭の下がる思いです‥‥。

◎ 「こつこつこつこつ‥‥」田村事務研の今までの取り組みは正にこれですね。PDCA サイクルの活かされた研修はすばらしいものです。
広範なカリキュラムを消化する研修会の終了後は、かなりの疲労感を覚えたものです。しかし今になった考えたとき、事務職員の仕事（職務）？とも思えるような内容まで研修してきたお陰で、学校の仕事全般に理解が深まり、現在の実践につながっている気がします。
講師を任せられることで、自分自身が一番勉強になっていました。

◎ 読んでいてその通りだと思いました！講師をやってみてわかった事、アンケートを集計する事によってわかった事などたくさんありました。

◎ 研修の企画とはこれほど難しいものだったのですね‥‥。毎回「ほんとにこれでいいのか？」と考えておりました。
特に委員長の負担は相当重いはずです。当時は企画側も受ける側も、つらく苦しい時間ではなかったかと‥‥。

第５回・８月号	プログラムにちりばめられた夢
情報と交流との夢、グループワーキングの夢、PC スキルアッププログラム。ひとりで学ぶ・みんなで学ぶ、プログラムもデザイン	

◎ 平成８年度の県大会を懐かしく思い出します。何も分らない私までメンバーに入れていただき、今考えても心苦しい気持ちです。当時は自分なりに協力して頑張っていたつもりです。若い（当時は若い方でしたので…）会員の経験に…と仲間に入れていただいたのだと思いながら、あれから殆ど変わっていない自分にガッカリします。出来ないながらも、常に前向きに取り組んでいかなければ…と改めて感じました。県大会を思い起こせば、電話回線を利用したパソコンでの発表は、本当に衝撃的なものだったと思います。
スキルアッププログラムについては、スタートの時期に育休中だったこともあり、復帰した頃には、ついていけないなと思った記憶があります。でも、実際に受講したときには、本当に役に立つ内容ばかりで、とても充実した研修会だと感じました。他に受講したい内容が受けられないときにはもどかしいし、時間が足りないと感じることが多かったです。

◎ 三春の蔵の２階でのパソコン研修が懐かしいです。あの研修のおかげでパソコンが使えるようになりました。
また、ＭＬで出勤簿の集計講座もやりましたね。今もあの時に作った表で勤務状況報告書を出しています。
市販のＰＣマニュアル本は私には難しいので、スキルアップのマニュアルを綴ったファイルは手放せません。そういえばあの資料に載っていたはず…と、読み返すことがあります。そのため、職場の引き出しに入れてあります。
受けた単元以外は、頂いた資料で自習してプログラムの表の「済」に〇をつけるのが何ともいえません。

◎ コンピュータ研修もだいぶ助けていただきました。スキルアッププログラムは永久保存版として活用させていただいています。キャッチコピーがやる気にさせてくれています。

◎ 過去の状況などがわかり、こうした研修が大切なんだと思いました！

◎ この研修はほんとうに実務に沿っていて助かりました。わかりやすい資料やスキルアッププログラムは、じぶんでも目標が明確にできて良かったです。

第６回・９月号	夢が叶った!?　情報化すすめ方プラン
夢をつなぐ一本のヒカリ、情報化すすめ方プラン・３つの柱、田村のＭＬがめざすもの、ＭＬとＯＪＴ・ＯＬＴ、コミュニケーションの大切さ	

◎ 広域イントラネット導入時、育休中でした。復帰したときには話題についていくのが困難でした。ML については、事務研修会のときにしかできなかったたくさんの仲間との情報交換が、学校に居ながら可能になり、夢のような話だとつくづく実感しています。

◎ 事務研修会開催通知などを田村事務研ＭＬで配信するのが当たり前になっている環境が、実は凄い事なんだと思います。印刷して封筒に入れて郵送して、それが送信ボタンで済んでしまうんですから凄いです。田村事務研ＭＬは、質問すると誰かは答えてくれる安心な場所ですし、色々な事例に触れ勉強をする場所です。

◎ メーリングリストによる情報の共有は画期的です。将来学校間連携（共同実施）を行う際にもたいへん役立つことと思います。

◎ 私が採用になってからは当たり前のように活用しているＭＬですが、これも田村だからできているすばらしい事だと改めて思いました！会員の方（先輩）からのタイムリーなお返事はとてもありがたく感じています。

◎ 電話連絡やファクス回覧をしていた頃がなつかしく‥‥。またＭＬは、それでは聞けないような事務処理上の諸問題も共有または解決でき、今やなくてはならないものとなりました。

第７回・10月号	つたえよう今を、届けよう夢を
あぶくまへの思い、あぶくまが果たしてきたもの、じむ Planner とサイト運営、あぶくまのリニューアル、新たな広報活動に向けて	

◎ 広報委員会に属したこともあり、会報あぶくまへの思い入れは強い方かもしれません。会報を通して会員同士の親睦が深まり、また、たくさんの斬新なアイディアや会員の実践なども知ることができて、とても興味深く、毎回楽しみにしていたものでした。今後は、事務研の取り組みを外へ向けて伝えていくことが大切なのだと感じました。

◎ 毎月配信される「じむ Planner」は大変役立っています。下にある期日未定で昨年度の締め切り日が書いてあるのがあるので、そろそろ通知が来るはずだから準備をしておこうと、心に余裕を持って仕事ができます。

◎ じむ Planner はたいへん助かっています。「あぶくま」が「あぶくま Clip」になったのもタイムリーだったと思います。内容としては、制度改正の解説なども入れていただけたらと思っています。ホームページは全国からも注目されていてすばらしいです。

◎ 広報委員会設立から現在までの 22 年の歴史が、やさしい山並みのロゴ「あぶくま」とともによみがえってきました。会報「あぶくま」への思い、果たしてきた役割、そして新しい情報提供のスタイル「メルマガ」配信へ…。伝えるかたちは変わっても、これまでどおり会員みんなで知識や経験、ノウハウ、そして「夢」を共有したい。その思いは変わりません。今後さらに地域や職種の枠を越えて「学校事務」の思いを伝えていくためにも、組織的なビジョンを織り込んだ外部への発信を意識して活動していきたいと思います。

◎ 個人的にはあぶくま特集号を毎年楽しみにしています。今年はあぶくまクリップ（メーリングリスト）になりましたが、本校には過去のあぶくまがＨ８年度～あったため、時々眺める事があります。過去の田村の様子がわかり、とても良かったです。紙媒体の方が読みやすい気もしますが、メーリングリストは手間も省けていいと思います。

第８回・11月号　積み上げるちょっとの夢

広報活動を考える、たむら事務研ちょっとニュース、夢を積み上げる、広報も連携していくとき

◎ 外へ伝えることにより、たくさんの応援団を作っていくこと…これからの私たちにとって大切なことだと思います。外へ発信するために作られたブログは、会員全員でつくり上げていくものであり、伝える側は、目的とビジョンを明確にしながら伝えていかなければならいのだと思いました。一会員として、協力していかなければいけないと改めて思いました。

◎ 広報はいつも読むばかりで受け身になっていたなと思いました。広報委員会をしていた頃を振り返ると、会員向けに作っていたなと思います。これからは、外に向かって「今をつたえ」「夢を届け」なければならないんだと思いました。そういうことを考えると会員全員が広報委員なんですよね。

◎ 「自分たちの取り組みを知っていただき、学校事務を理解していただくこと」、「内側より外側へむけての広報」。本当にはっとしました。自分（たち）のなかで完結するものでは決してないのだ、と。そして同時に「外部だけにむいているものではなく、自分たちのまとめになっている」ということばにも、本当にそうだな、と思いました。
ちょっとニュース原稿依頼など、学校内がワタワタしていて自分自身に余裕が無いときなど特に、「うわぁ‥‥どうしよう‥‥」と思ってしまうときも正直あったりしました（すみません‥‥）。でも、あらためて文章にまとめるという作業はとても意味（意義）があり、自分の課題がみえてきたりして、非常に有意義だったりします。
でも、正直なところ、会員の皆さんに原稿依頼をして、あっさり断られたり（強い拒絶をうけたり）するときはやはり凹みます‥‥。「『広報委員会が運営するもの』ではなくて『会員がつくっていくもの』であり『発信する』側になる」まさにそのような意識（もちろんわたくしも含めて‥‥）が大切だと思います。

◎ 自分たちの取り組みをどんどん気軽に発信していけるようになったらすばらしいと思います。社会から必要とされる職となるためには、我々の専門性や教育とのかかわりをアピールする広報活動が重要だと思います。

◎ 今はネットワークが発達し、ブログがタイムリーで人気があります。学校事務の内容は、地域どころか学校内（教職員）にもあまり知られてないような気がします。ちょっとニュースで事務研の内容を公開するのは、地域の人たちにも情報公開できるのでとても良いと思いました。そして多くの方に、学校事務について知って欲しいと思いました。

第９回・12月号　夢のスクラム

結いの精神から、学校事務検討・改善委員会、スクラムの広がり、夢をスクラムで

◎ 田村市の学校事務検討・改善委員会発足当時は、私は三春町に勤務していました。広治先生の後に田村市に入ったこともあり、肩身の狭い思いでした。今でも状況等を理解していない部分が多く、申し訳なく思っています。内容

や状況の把握に努めていかなければと思います。

◎ 田村市の誕生と同じくして「田村市事務職員会」を発足させ、合併した田村市での学校事務のすすめ方を話し合う「田村市学校事務検討・改善委員会」により、「文書」「財務」「備品」「就学援助」「情報化」の５部門について整備がはかられ、学校事務が円滑に進められるようになったことは、田村市にとっても私たち学校事務職員にとっても大きな成果であり、まさに「夢がかたちになった」瞬間でもありました。計画されたことを実行に移すこともまた容易なことではありませんが、そこから生まれる困難もまた力になるものでした。

他地区との交流において「備品の管理・整備」について実践したことを紹介する機会もあたえられましたが、経過や実践までの苦労や喜びも自信をもって伝えることができました。一人では到底できないことを事務研活動でみんなの力を結集し「スクラム」を組むことのすばらしさを実感しました。今後は職場でのスクラムを生かして実行していかなければなりませんね。

◎ 三春町では、就学援助事務処理要領を整備することができました。要領の案を作成し、それについて教育委員会の担当者を交えて協議・確認を行なった時に、医療券の期限や、学区外から学区外への通学生徒への援助について意見をいただき、なるほどと思った事がありました。

文書や、町会計、備品にしても、事務職員だけじゃなく教頭も校長も町教委もお互いが何とかしたいと考えているはずですなんですよね。

◎ 「こつこつこつこつ」がかたちになってきたのがすばらしいです。

◎ 田村市の統合は本当に大変だったと思います。現在も検討。改善委員会を立ち上げ、文書規定や備品管理の整備を行われていますが、小野方部でも大変参考にさせていただいています。忙しい中ではありますが、事務職員で集まって同じ規定を作成しておくと、人事異動で事務職員が変わっても仕事上とてもやりやすいと思います。講師派遣事業についてもとてもいいと思いました。地区内でも刺激を受けますが、地区外の研修内容等を見るのは大変貴重な経験だと思いました。

第10回・１月号	夢か幻か、あんしんサポートプラン
こんなことできたらいいな、事務研ベース・田村の共同実施、たむら学校事務あんしんサポートプラン、夢に向かって「やってみよう」	

◎ 共同実施は、お互いにカバーし合ったりチェックし合ったりして、より正確・迅速に職務をこなしていくことで、児童生徒や地域、学校の役に立つ仕事が出来るのだろうと思います。

◎ 共同実施について、以前は学校現場から離れなくてはいけないのかと思い込んでいて反対でしたが、今は連携・協力・確認によってより確かな事務処理・事務運営が出来そうなので賛成です。

学校事務職員が人事異動で変わっても、安定した質の高い学校事務機能を提供し続けるためにも共同で事務を進めることは考えなければならないと思いました。

◎ 大きい学校の子どもたちにでも小さい学校の子どもたちにでも同じように、子どもの豊かな学び・育ちを支援するため、格差なく、（もちろん学校の特色という違いはあると思いますが、）標準的な学校事務機能を提供していくことが大事である、とあらためて感じました。未配置校および大規模校への支援、学校にいながら出来ること、学校にいてこそできることを、考え、すすめていければいいな。。と思います。

◎ 「一歩前へ」。後退することなくプランを推進できたらと思っています。現に地区全体の活動から、市や町単位などの取り組みへシフトしています。より一層の連携を図りながら標準化の推進と学校事務の確立を目指した取り組みが実現するものと思います。グランドデザインと一体となった「あんしんサポートプラン」が「ゆめをかたちに」するものと考えます。

◎ 効率化だけでない共同実施の実現が必要だと思っています。研究も必要ですがとにかく集まってみたいと思います。学校間連携については、校長会などの意見も集約しておいた方がいいのではと思います。

◎ 正直言うと共同実施については最近知ったのですが‥東北地方の共同実施について話を聞く機会があり、とても勉強になりました。新卒だった私にとっては、何の研修もなしにいきなり多忙である４月に大量の事務処理があったのはとても大変だったので、個人的には新採用のみ複数配置を望みます。経験豊富な方から教えてもらえると間違った知識で覚える事もなくなるだろうとは思いました。それから希望する人には共同事務（？）も優先的に行うの

もいいのではないかと思います（異動した年度は慣れるまでに時間がかかるので在職年数長い人が優先でもいい気がします)。

第11回・２月号	グランドデザインが夢をかたちにする
活動をわかりやすくまとめる、グランドデザイン１・活動、２・連携、３・手立て、４・目標とテーマ、まとめに代えて	

◎ 子どもの豊かな学び・育ちを支援するため、学校という組織の中で事務機能を最大限効果的に提供していくこと…常にこの意識を持って仕事をしていかなければならないと思いました。また、自分たちの取り組みをしっかり伝え、ビジョンを示し、夢をかたちにすることが大切だと思いました。

◎ 何のためにどのような活動をしているのか、きちんと整理して外側へ伝えていくことが大切だと思いました。
「『何を』にあたるこうした活動を、学校事務職員だけのものと捉えるのではなく、現場での具体的な実践として学校ぐるみで展開していくことも考えていかなければならないでしょう。」。「目標と手段とを混同していたこともわかってきました。」。ああ、そういうことかと思ってしまいました。うまく表現できませんが、研究してから実践ではなく、実践しながらの研究なんだなと思います。泥臭い地道な取り組みだからこそ大事なんだと思います。

◎ 今までの事務研活動は、事務職員の資質向上を主眼とした研修・研究活動を進めてきた訳ですが、活動を進めていくにつれて、様々な関係機関（教育委員会、校長会、教頭会等）を含めた全教職員との連携の必要性が出てきています。全事研でもグランドデザインを作成・提示しておりますが、田村地区事務研でも活動内容を会員にも、外部へも具体的に伝えること、わかりやすくまとめることが求められる状況となったように思います。今までの活動を振り返り、活動内容を整理し事務研として何を目指し、到達目標を具体的なものにすべく会員の意見を集約することも必要ではないでしょうか。そうすることによって、「夢をかたちに」することができるものと思います。

◎ グランドデザインを実現するための「アクションプラン」があり、それに年度ごとの数値目標などがあればより実効性があり、自分自身に迫ってくるのではないでしょうか。

◎ 今まで当たり前だと思っていた田村地区の実践は、改めてとてもすばらしい事だと思いました。パソコンにふれた事がないに等しい状態で就職しましたが、お陰様で仕事をするには支障がないくらいまで慣れる事ができました。これからは田村地区会員として、役立てる事があれば力になっていきたいと思います。

第12回・３月号	夢をあきらめないで
新たな夢のスタートへ、夢をつたえよう、夢に向かって、夢をあきらめないで	

◎ 先日、県事研研修会で、新潟県の共同実施についての研修を受けました。共同実施に当たり注意している点として「目的を忘れない」「学校事務職員のための共同実施ではない」などいくつかあげられましたが、その中に「夢と展望を持つ！」というのがありました。ＳＦの世界でしかなかった宇宙エレベーターが実現可能な時代です(^^)。仲間がいれば何だってきっと出来ます。「夢をたくさん見て、その夢をみんなで語り合い、夢を思い描いて」いきましょう。

◎ 良き先輩事務職員に恵まれ、校長会・教頭会等の支援をいただきながら、活動テーマ「学校事務の夢をかたちに～そこから改善・定着化～」を推進してきた田村地区事務研ですが、あの頃20代の事務職員が40代後半のベテランとなり、事務研では若い事務職員の指導的立場となりました。職場(学校)では、学校運営の中核的な立場を担うようになってきました。徐々にではありますが事務研活動で培われたものが、形となってきていますし、若い事務職員がそれを引き継いでおります。心強いものを感じます。
「学校事務のゆめ」を夢ままで終わらせない、そんな気構えが必要ですし、課題は山積みされたままです。学校事務について、もっともっと「夢」について語り合いましょう。思い描きましょう。後ろを振り返る必要はないのです。働きがい、やりがいのある、そんな学校事務を目指して、夢をあきらめてはいけないのです。

◎ 地教委主導の共同実施ができればと思います。まず田村の共同実施から始め、福島県全体へ波及していけば‥‥と思います。また、グランドデザインは必要ですね。そして評価も‥‥。意識改革を図りながら、子どもたちの豊かな学び・育ちのために、学校事務職員として取り組んでいきたいと思います。

全　般	その他の感想・意見等

◎ 原稿の執筆、本当にお疲れ様でした。段階を踏んでわかりやすくまとめられていました。一会員でありながら初めてわかったとこもあり、また、あるべき姿勢を考えさせられたりと、とても勉強になりました。
一歩踏み出すこと、外へ発信すること、スクラムを組むこと…大切なのだと改めて実感しました。仕事をしていて、こうしたいという思いは常になるものの、私に出来るかなぁという気持ちが常にあります。でも、前向きな姿勢で出来るところから一歩ずつ取り組んでいかなければと思いました。

◎ 一年間の執筆、大変お疲れ様でした。ちょっとニュースなど、学校関係ではない友達にもどんどん紹介しているところです。学校事務を知って頂き、またいろいろなお話を伺ったりしながら、私自身も少しずつ、こつこつと日々の仕事を頑張っていきたい、迷ったときは、「子どもたちの視点になっているか」ということを常に思いだし、頑張っていきたいと思います。至らない部分も多く、勉強不足の私ですが、今後ともどうぞよろしくお願いいたします m(_ _)m。
ありがとうございました。

◎ 手元に12月号までの学校事務誌があります。毎号「学校事務の夢をかたちに」を中心に（というか、これのみという場合も）読ませてもらっています。ほんとうに良くまとめられていると感心するばかりです。
確信するのは、今回の原稿が、今後の地区事務研や他の事務研の「指針」として活用されるだろうということです。著作権のこともあるかもしれませんが、１冊の冊子として世に出ればなという気もします。
自分たちの歴史を振り返りながら、30 年経った現在、学校事務というものが確かに進化してきたなという実感があります。そして、今自分たちに求められているものも大きいととても感じます。１人１人が、事務研で学び共通理解のもと現場で実践する時代ですね。
イメージとか意識とかは、ほぼ全員が持っていると思います。そこから具体的に実践するには、どのような方法があるのだろうか。原稿にもあるように、今後手立ての研究がほしいのではないかと私も思います。

◎ 我々にとって田村事務研の存在は大きいです。こうして取り組みをまとめていただきありがとうございました。今後、マネジメントの視点で学校事務を考えていくことも必要になるのではないかと思います。現在教頭会で「学校経営研究会」を主宰していますが、校長、教頭、事務職員など多職種で「これからの学校づくりを考える勉強会」などができればいいな‥‥と思っています。

◎ 今後学校事務職員は事務処理だけでは生き残っていけないと思います。新しい学校が求められている今、学校事務も変わらなければならない時代です（アウトソーシングできない部分を我々の仕事に）。社会から必要とされる学校事務職員とされるよう、積極的に社会へアピールしていきたいものです。

◎ 普段からかなり（うすらぼんやり）漠然としか仕事をしておらず、何か具体的に目標を持ってそこに向かうというのが不得手な私です。もう少し心して研修会などにも臨まなくてはならないと思ってはおりますが‥‥。１年の長期連載お疲れ様でした。「夢」をテーマにした内容で、とても楽しみでした。